

からである、世には何か法然様を苦める爲めに起つたやうに云ひ難  
 す人もあるがそうではないのちや、この座主ご云ふは叡山三千坊の  
 總大將で、今の管長様ちや、所がこの顯眞大僧正は三千坊の座主に  
 もならるゝ方だけありて内外の學問に通達して學徳兼備の高僧であ  
 つたが、兎角出離の大事に安心がならぬ、自力の修行を日夜に究  
 めさせられ、即身成佛ちやごいろく考へられてみても仲々以て出  
 離解脱は覺束ない、或時は座禪觀念の床に登り心を散らさず静めん  
 ごせらるれば、妄念頻りに起つて五塵六慾に走らざることなく、心  
 月を觀ぜんごすれば妄念煩惱の雲忽ち起り、口には即身成佛ご語れ  
 ごも身はこれ底下の凡夫ちや、心には娑婆即寂光土ご安ずれごも事  
 相には瓦礫充滿の穢土ちや、此に於て顯眞僧正も即身成佛ご云ふも

三諦圓融ご云ふも理屈までのこと、諦め、法然上人の徳行の尊高き  
 を聞いて、羨しく、殊に凡夫直入の淨土門をお開きなされたご云ふ  
 評判を聞いて、その法門聞かまほしく思ふて居らるゝ折柄、この御  
 庵室へ平生御出入の永辨僧都ご云ふ方がある。或時座主には永辨に  
 向はれて、其許は出離の大事は如何に落ちつかれしぞご尋ねらるゝ  
 ご、永辨は、左様で御座ります、私もかねてより心にはかゝつては  
 ありますれごも、今更心に思ひ究むる義も御座りませぬご申された  
 れば、われもそうぢや、それに付て近頃吉水の里では法然上人が專  
 修念佛を弘通され、何でも殊の外の繁昌にて上は後白河法皇、高倉  
 院を始めごし奉り、月輪關白、六角前中納言、その他平家の一門で  
 は小松内大臣重盛公、越前の三位通盛公など歸依さるゝご聞くから



は法然房も只者ではあるまい、甚麼教へをして居るか、委細聽聞申したし、他の者を遣はせば間違も出來、傍人の誹りもあらん、其許太儀ながら吉水の禪房へ赴いて委細承つて下されよごあつたので、永辨僧都は早速領承して吉水へ參り法然上人に謁し、右の趣きをよくはしく言上せられた。この時法然様は

「それは顯眞僧正には近頃御殊勝なところで御座る、この度生死の迷ひを離れて佛果の證りを開くことは道綽善導の御指南通り只自力の計ひを止め本願の不思議にまかせ唯うらくご念佛し給ふより外はなし、されば往生疑ひなし、往生疑ひなければ成佛は即ち彼土の定りにこそ。」  
永辨は怪顔な容子、何ごなく物足らぬ心地で

「これより外に奥深きことは御座らぬか。」  
「只これのみなり、淨土門は愚鈍の機を導く教なればこれより外に奥深きごはなし、依つて顯眞僧正にもいよく後生が大事ご思はれたなら自力の計ひをやめて法然がすゝむる念佛門に入り給へご申されよ。」

永辨僧正は早速叡山へ歸つて委細の趣きを申上げた、これを聞いた座主は大に立腹し、法然坊は道心堅固の坊さんちやご思ふて居たにさてく我慢な法師ちや、この顯眞が歴々を使者に立て、淨土の法門を尋ねに遣はしたるに在家の愚痴な者ご同様にご一念に彌陀を頼んで只うらくご念佛せよご、俺を馬鹿にするのも程がある、何ちや念佛申せご、念佛申す位なごはわざく使者を立て、法然房に尋



ねずとも三歳の童兒も知つて居る、それ位で佛の證りが開けるごなら何の傳教弘法の大徳方が家を捨て身をすて、辛ひ修行をせられるものぞ、それにこの顯眞を在家の尼孃同様に視做して、只念佛せよごは他を見切つた言語同斷な言ひ分、如何に智慧第一ご云はるゝ法然房でも舌長き言ひ分ご大に立腹せられた。

この立腹は叡山の座主ごしてはなげねばならぬごぢや、何故なれば、今までは聖道門の難つかしい法門ばかり目を曝して御座つて常に一心三觀やら三密止觀やら、そんな高尚な理を談じて御座る所へ思ひもよらぬ念佛一行の心易さ、只一念彌陀に歸してうらくご念佛申せごある、一口の傳へなれば愚鈍の尼孃を教へて居るやうで眞實にならぬ、人を黽つて居らるゝやうぢやご立腹せらるゝのも無

顯眞僧  
正は念  
佛には  
素人

理のないごぢや。

然る所、その傍らに居て委細聞いて居つた人がこのごをくはしく吉水の禪房へ参りて法然様にお告げ申したのぢや、これを聞かせられた法然様はニツコリご御笑ひ召され、如何程智者學匠ご言はるゝ人でも自分の知らぬごは疑ひの起るものぢや、叡山六十二代の座主ごして天台の學問には成程偉い顯眞僧正ぢや、けれども念佛門は一心三觀や、三密止觀の學問ごは方角が違ふ、天台の學問には偉ひ顯眞僧正ぢやが、念佛門にはまだ一向の素人様、疑ひが起りて立腹をせらるゝも無理なごぢやないご御述べなされた。

成程、念佛門の教へに二途あるべき道理はない、これは學者に教ふる法門、これは無智愚痴に説く法門ごの分ちはない、文殊舍利弗

法然上人御一代記説教上



が問はれても一念彌陀を頼んで念佛するばかり、一文不知の尼女房に向ふても一念彌陀に歸して念佛申せちや、それちやから文珠舍利弗のお稱へなさるゝ念佛も、在家の尼嬖が稱へる念佛も念佛の價値に變りはない、龍樹天親のお歴々でも自力をすてゝ後生助け玉へ一文不通の在家でも自力をすてゝ助け玉へ、頂く信心が他力より賜る信心なれば更にかはる筈がない、信心に變りがなければ稱ふる念佛も同じここ、稱ふる念佛が同じければ參らせて頂く浄土も同じ一味の安養浄土ちや、この他力の味合が合點が行かぬものちやで顯眞僧正がムツクリ立腹せられたのちや。

この法然様の御言を聞かれた顯眞僧正は、成程知らぬことは疑ひの起り易ひものちや、然らばこれより浄土の學問をしてみやうと直

ちに叡山を下りて大原の里の立禪寺へ閉ぢ籠り百日間の期を定め、浄土の三部經を初めとして、龍樹の易行品、天親の浄土論、曇鸞の論註、道綽の安樂集、善導の五部九卷、源信の往生要集から、その他數ある數多の聖教を行きつ戻りつ御調べになり、大略は解つたやうちや、けれど悲しいことには餓鬼は水を見て火と見る如く、他力不思議の御本願であり乍ら自力の眼を以てみる故に他力の美味が見つからぬのちや。

大略調べ了つた顯眞僧正は又永辨を使者として、浄土の聖教を取調べましたで御座るが、一應不審の段も聞き糺したければ親しく膝を交へて論じたく思ふ故に此所へ法然上人を招待し來れと申さるゝと、これを傍らに聞いて居つた相模房阿闍梨、大原の本性上人は、

法然上人御一代記説教上



一七八  
少時待ち給へご押し止め、座主には法然房を招待せらるゝごは一  
應は御最もの次第なれども、よくよく考へてみれば座主僧正様には  
三塔の貫主、博覽深智の譽れある方なり、これ日本佛教中の關取り  
格、又法然房も一宗開くごあればこれ亦博學の關取り格、日本での  
關取ご關取ごの御出合なればこれ決して容易ならざる大事件で御座  
ります、只法然房ご御兩人にて御會合は後人の嘲りも如何あらんご  
思はる、迎も念佛の評判を聞き召さんごの御覺悟なれば、日本中の  
碩學を皆集められ、日本中の評判にかけて念佛ご聖道ごの白い黒い  
を吟味なされては如何で御座りましようご申上たれば、顯眞座主も  
これを聞いて成程ご思はれ、然らば回文を認めて日本國中の碩學高  
僧を皆寄せ集めようごて、相模房が筆執りて回文を認められた、先

づ一番に三論の八不中道を究め給へる眞言秘密の大將梅尾の明惠上  
人高辨、次に住吉八幡ご仲の好い笠置の解脱上人貞慶、次に若い時  
から一遍も問答には負けたごのないご云ふ八宗兼學の智海法印、  
天狗まで怖れたご云ふ竹谷の靜嚴僧都、一代經を十六遍まで繰り返  
したご云ふ法持房證眞、その他靜憲法印、學秀僧都、神樂岡の空法  
房、八阪の見佛房、嵯峨の念佛房、三井の大貳法印など御歴々方が  
三百八十餘人、それに弟子を加へて二千餘人、この回文を見た叡山  
では西塔東塔、黒谷横川の間より集り、南都では東大寺、興福寺、  
招提寺、元興寺、明安寺、大安寺、法隆寺等の七大寺、その他三井  
寺、高野山、何れも法然上人へ一ご不審打つてみようご謀る人々な  
れば日時の來るのを待ち受けて一同に大原立禪寺へ集まられた。



これが爲め八瀬小原の民家までが學者坊主の宿ならぬはなく、  
遠がの幅廣い田舎もギツシリと鯨詰めの有様ぢや、かゝる中には眞  
實出離の一大事が心にかゝりて法然上人に値ふて聽聞して未來得脱  
を究めたいと云ふ心で集る人もあり、又中には念佛の繁昌を嫉んで  
一問答して法然様を遣り詰めようと巧んで來る人もあり、或は大勢  
の力にまかして淨土門の根を絶ちて念佛の葉を枯らさんとの我執に  
て集る人々もあり、いよくこの天下分け目の大論議は明日と逼つ  
たので、大衆一同は皆手にく唾して待ち構へた。

吁、御一同に何と思はるゝやら、誠に危い御問答では御座りませ  
ぬか、先方はそのやうな名ある學者達ばかり、此方は法然様御ひと  
りぢや、何と御一同に晴れ業では御座らぬか、この時法然様が少し

でも誤り給ふか、又は御返答が出來ずば今の世に念佛の法門がこの  
やうに御繁昌ではあるまいぞや、天下の學者を引受けて、聖道門淨  
土門と張り分けて念佛一門の勝れたことを御返答なされたればこそ  
今は津々浦々に弘まらせられて、ムダく地獄へ墮ちて了ふべき我  
等が胸に六字の信心を頂き兩手合して御禮報謝の念佛の浮むやうに  
なつたのは偏へに大悲の御念力ぞと棚引く雲の絶間よりさやけき月  
影のあらはるゝ如く、惜しや欲しやの煩惱の雲の絶間より折々稱名  
の月影のあらはるゝやうになり得たは遠くは五劫永劫の御苦勞、近  
くはこの天下分け目の御問答にお勝ち下されたる御恩ぞと佛祖の御  
徳を兩肩に荷ひ稱名念佛して近づく淨土の往生を待ち受けられよ。



第十七席

法然上人 大原に入り給ふ

さて音に名高い大原問答は文治二年八月七日のここ、釋尊御入滅後二千百三十二年目に相當してありて丁度法然上人の五十四歳の御時ぢや、三百八十餘人の諸宗の學者達は各々お弟子を連れさせられて集る坊さんは二千餘人ごある、法然様はそのやうな騒ぎは少しも御存知なく、只顯眞僧正御一人ごしみる議論するここ、思召しお弟子聖覺法印を初めごして幼學雛僧の今道心ばかりを少し御引きつれなされ大原指して御出なされた。

さて大原村へ御入りになるご、村中が喧々轟々ご仲々騒しい、まるで大浪小波を打つやうな有様、お弟子達が不審に思ふて村の家々

大原の  
賑ひ

を覗いてみらるゝご、此方にも四五人、彼方にも七八人車座になつて今日の評判をして居る法然様のお弟子の姿を見た村の者は、この度は實に日本開闢以來の大問答ぢやげな、貴房方は何方のお味方で御座るご尋ぬる故に、お弟子方は驚かせられつゝ、その開闢以來の大問答ごは何れの問答で御座るご尋ねらるゝご、一方は今日日本に名を擧げ給ふ吉水の法然上人、一方の相手は日本國中の佛法の總學者叡山の顯眞大僧正を初めごして本性上人、永辨僧都、相模房阿闍梨、高野の明遍僧都、柵尾の明惠上人、笠置の解脱上人、三井の公胤、八宗の能化智海法印等、碩學三百八十餘人、その他南都、叡山、高野、三井、日本の諸寺諸山の學者悉く走せ參じ總じて二千餘人で御座るげな。

法然上人御一代記説教上



然るにこれに對して法然上人只御一人、如何に舍利弗文殊の智慧を具へられ、富樓那の辯舌を振はせられても多勢に無勢、この坊主衆中には迎もく相手にならるゝことは叶ふまい、まあ今時御繁昌の念佛のお勧めも今日限り斷絶ご存じますと語るのを聞いた、若いお弟子達は吃驚仰天、早やワナ／＼と顛ひ出し、若しや今日御師匠様が御負け遊しては念佛の法門はつぶれて了ふ、こんなことならわれ／＼のやうな無學初心の小僧ばかりを御連れなさらずに善惠様や隆寛様のやうな學問の勝れた方を御連れなさればよかつたに、まあ早うこの事を御師匠様へ申上げようご御側へ參られた。

法然様はお弟子方が驚いて御座る容子を御覽なされて、何をそのやうに驚いて居ると仰つしやる、お弟子は顛ひ乍ら、夕、大變なこ

ごが起りました、今日は顯眞様ばかりぢやなうて日本國中の名ある學者方が御集りになり、彼尊様を取り籠めて挫しがんと學匠達が三百八十餘人、それに附添いのお弟子方が千餘人、何でも二千餘人も集つて居らるゝ容子で御座ります、これはまあ今日は立禪寺へ御出になるのは御見合せになりて御歸坊なされては如何で御座りまじようご申上た、スルご法然様はニツコリ御笑ひなされて

「ヤレそれは大慶至極に存するよ、よく聞け、法然房は仕合せ者よ、弟子一人育つるには並大抵のここではない、小兒の時から守り立て御經素讀の辛勞苦勞より、一句の法門を語るまでにするのは師匠の難義は云ふばかりなし、それに引替へ今日は立禪寺へ集る天下の明師を一座の問答でスツカリわが弟子とするの



一八六  
は手も濡さず三百八十餘人の大學者、その他千數百人の坊主  
達をわが弟子とするは、吁今日はよい上足の弟子を得ることよ  
何ご法然房は仕合せ者よ。』

ご、喜ばせられた。けれどもまだお弟子の中には危んで居らるゝ方が  
ある、御師匠様にはこのやうな日本國中撰り抜きの大學者を對手と  
して一々問ひかけられても御答へ遊ばずであらうかこの案じ貌ぢや  
『コリヤ、そのやうに案じるには及ばぬぞや、勝つて負けるのこ  
今日の論議はそれまでも行かぬ、この念佛の功德の勝るゝここ  
は大聖釋迦牟尼如來が一切經の中に入る所に御説きあらせらるゝ  
のみならず、弘法大師でも傳教大師でも皆この念佛の功德を御  
讚歎なされてある、この法然ばかりが云ふなら或は承知も出來

まいが御自分の祖師の言はれたことならばイヤごは言へまい、  
さればこの論議は負けるの勝つこと云ふ程の論議をするまでも  
ない當然のこごぢや。』

ご仰つしやるので、これを聞かれたお弟子方は少しは安堵せられた  
やうぢやが、それでもまだ十分安心がならず、危みながら立禪寺の  
山内へ御供申し上げた。

本堂は申すに及ばず、臺所から白砂に到るまで蕙を引きつめ、三百  
餘人の學匠は本堂に列席し、その他のお弟子方はその下に席を取つ  
てギツシリ詰まつて居られる。法然様のお弟子の角張成阿ご云ふは  
信濃國の住人で、元は角張七郎ご申す者であつたがさのみ學問があ  
るではなけれども大力無雙の者であつた、この成阿が縮詰になつて



居る大衆に向ふて、法然上人の御入來なり、サア／＼除けたり／＼  
と云ふて先に立つて案内すれば法然様は後から尾いて本堂の椽に上  
り給ふた、成阿は四方を見れば内陣の前に高座二つあり、一つの高  
座には顯眞が既に座を占められ、他の高座は空席ぢや、成阿は聲張  
上げて、これぞ法然上人の高座なるかなと申せば、役人らしき者出  
で來り左様に候ご答ふ、成阿は遠が武士の果て故前後に心を配り若  
しや高座に危きことなきか高座の疊なごを踏みならし、忍びの者  
でもありはせぬか、若しや御師匠様を殺すまいものでもないご能く  
／＼改め、さて／＼高座の上を見らるゝと、顯眞の坐して御座る高  
座には五疊臺の上に虎の皮が敷いてあるが法然様の高座には何も敷  
いてない、由つて成阿の心には座主の官祿は勝れたりご雖、わが御

師匠は今日は請待にて大導師として來り給ふ、たごひ一分でも座が  
低うては吉水門下の顔立がせぬ、虎の皮より低うてはいかぬとて、  
その代りをごクルリ／＼見回つて何か敷物がないかご探さるゝけれ  
ごも見渡す限り坊主の頭ばかりで何物もない、フト内陣を見らるゝ  
と禮盤がある、その上の半疊こそ屈竟の敷物なれご、早々内陣へ上  
つて半疊を取り出して來て、サア／＼これへ御上り召されご敷いた  
ので、法然上人はニコ／＼と乍ら念佛の珠數繰らせられつゝ御座り  
なされた。

法然様は高座の上へ御座りなされたが、さて吉水から御附き申し  
て來た弟子方の座せらるゝ席がない、スルと又成阿は大音聲を張り  
あげて、法然上人の弟子共の座り場がない、平僧なれご仕方なし、



時によりては内陣へ上りますご、皆内陣へ上げてサテ成阿房獨りは法然上人の後ろに座を占め、四邊を見らるゝ高座の横の方に大きな坊主が二人立つて居る、一人の坊主は如意を手に振り上げ、一人は法衣の袖を玉襷にして構へて居る、成阿は不審に思ふて、コレコレ御出家さん、お前様はその大きな如意を振りあげて居らるゝのは何の爲めて御座るご尋ねらるゝご、その出家は左も横柄に、さればなり、若しも今日の問答に法然上人が只の一言でも無理なごことを云はれたら直様この如意を以て打ち叩く爲めて御座る、そんならお前様はその法衣の袖を玉襷にして居らるゝのは何ぢや、これは若し今日の問答で法然上人が一言半句でも餘宗を謗らつしやつたら直ぐに法然房の袈裟を剥ぎ取らうご云ふ存念で御座る。

これを聞いた成阿は、さても心得ぬ奴原かな、千に一つも御師匠の御身の上に障るやうな不都合をしてみよ、この鐵扇が御見舞申すご片手に持たれたる大形の鐵扇を逆手に指し上げ、イザご云ふたら打つてく打ち懲してやらんご怖い勢ついで待ち構へられた。

第十八席 熊谷の鉈捨藪

相續いて御相談に及ぶ法然上人の御傳説教、いよく進んで大原問答まで御取次に及んだごぢやが、この大原問答へは熊谷蓮生坊が御供申したご云ふ説ご、イヤお供申さんだご云ふ兩説あるが、併し只今でも大原には熊谷の鉈捨藪ご云ふ跡が残つてあるごごから考へてみれば、後れ走せにお供したごご、見ゆる。



何でも熊谷はこの大原の立禪寺で今日の問答のあることは一向知らなんだとみへ、例の如く吉木の御庵室へ参詣した、スルとお留守の弟子方から、今日は大原の立禪寺へ御出になりましたと云ふ、何の爲めにお出と聞いたら、何か顯眞座主の方と御法義の御物語のやうにありますが云ふので、それを聞いた熊谷は、さてく、残念なところや、お供申したならば無や有難い御法語も承ることが出来たであらうにご獨り言に云ふと、お弟子の方は、そのやうにお望みならば足早に行き給は、間に合ひまじやうと云ふので、熊谷は最もこの、直ぐに座を立ちて庭へ下りフト何心なく空模様を見れば、コハ如何に、怪しい雲行ぢや、大原の方から吉水の方へ、吉水の方から大原へ指して尋常でない雲が棚引いてある、吉水の方からは白い雲

が大原へ指し込んである、又大原から吉水へは赤い雲が入り込んである、これは決して尋常一様の雲行ではないのぢや。これを見た熊谷は太息を突いて少時見て居つたが、さてく、不思議なところや、其昔一の谷に於て合戦の時平家の一門は安徳天皇を護り立て、十萬餘騎にて一の谷に城廓を構へ、嚴重に須磨の濱邊を堀こなして要害堅固に堅めたるに、鎌倉からの打手として九郎判官義經、蒲冠者範頼馳せ向ふて頻りに合戦に及んだ時に、源氏の陣屋から白雲が出て平家の陣屋を覆ひ、平家の陣屋からは赤雲が棚引いて源氏の陣屋を覆ふて互ひに勝負の見へぬ時は赤と白の雲が互ひに睨み合ふてつたが軍術勝れた九郎判官義經は鶴越より超へて後ろに回り鐵拐ヶ嶺より一の谷へ逆落しに平家の陣屋へ押し寄せ、一



時に火を掛けたので、平家は思ひの外の敵を受け、あれよこれよと騒ぐ所へ陣屋は一面に火になりかけたので、全軍亂れに亂れ遣が生田の堅めも忽ちに破れて了ふて西海さして逃げのびた、その時平家の陣屋から棚引いてあつた赤色の雲は忽ち縮まりて、一天白雲が覆ふて、その時の光景は今に目の前に見るやうであるが、今日の雲行が丁度その昔の雲行に似てある、何でもこれは只事ではない、顯眞僧正と御師匠様ごだけの御法語ごは思へぬ、都合に由りては日本國中の人々を集め大原に於て聖道門と浄土門、自力門と他力門との佛法の軍さが始まるのではあるまいか、左もなくはこのやうな雲行のあるべき筈なし、何れにもせよ近來又なき大事件なりと、熊谷はわが庵室へ歸りて三尺に餘る大鉈を腰に差し、法衣の袖をひん結び、

佛法の軍さでかはない

韋陀天走りに走りて立禪寺へ行つてみれば案の如く、まだ問答は始まらねごも思ふに違はず日本中の碩學、八宗の明師が皆集まつて居らるゝ。

熊谷は大勢の中をば押し分け、漸う本堂の椽に上るご、御師匠様は高座の上になします、角張の成阿は御供申して法然様の後ろに控へて居る、熊谷は大音聲で、

「成阿房、御供申されしか、お身さへ居らるゝならば斯程に心痛せざりしに。」

ご、成阿が長い鐵扇逆手に持つて居るのを見て云ふた、成阿は熊谷の姿を見てニコ／＼して

「ヤレ熊谷殿か、左程心痛召さるな、一寸にても御師匠へ無禮



を加へたならこれで御座る。」

ご例の鐵扇を出して見せる。熊谷は椽によりながら、

「ヨシ、大衆を恃んで理を非に枉げて屈伏さし、たごひ指一

本にても恥を加へてみよ、昔し鍛ふた熊谷が腕試し、大衆の奴

原は一人も遁さず一分だめしに撫で切りにいたしくれん。」

ご、法衣の袖口を背で結び、黒々した腕に大きな鉞を振り上げて破

れ鐘のやうな聲で叫んで居る。

何ご御一同、一宗開闢するご云ふは並や大抵の難義では御座らぬ

のう、この大原問答は法然様の五十四歳の御時なれば御老體の中頃

ぢや、人によりては身代も稼業も息子に渡して了ふて樂隠居でもし

やうかご云ふ時ぢや、それに彼尊は八宗九宗の學者方に圍まれてこ

の御難義、七十五歳の御時には南都北嶺の嫉みに由りて御流罪の御  
身ごならせられての御苦勞ぢや。去年十一月の頃から御髪も剃り給  
はねば白髮蓬々として御頭を覆ひ、折烏帽子に直垂を着させられ、  
憐れなるかな簾も棟も破れ果てたるあやしみの輿に召され、御衣や、  
袈裟は剥き取られ給ひ、木樵草刈も同様に、罪名藤井元彦ご云ふ俗  
名までつけられ給ひ、八重の沙路を踏み分けて遙々四國までも御流  
罪の御身ごならせられたのも、元はご云へばこの念佛の一宗を興行  
し、末世に生れ後れた今日のわれ人を南無阿彌陀佛の一行で浄土へ  
迎ひ取りて無量永劫の樂をさせたいこの御慈悲からの御難義ぢやご  
思はれたなら、この御苦勞は他人ごごには思ふて居られぬ、わが身  
くの往生の爲めの御難義ごご、積る御苦勞を一分く引受けて



御慈悲尊やありがたやと喜び上げられよ。

第十九席

大原問答の結末

さて、一座が鎮まるこいよく稀有の法戦が始まつた、第一に問はれたのは今度の發頭人顯真大僧正で、如何に法然房、速疾に生死を離れ解脱をきはむることは天台眞言にあり、然るに念佛はこれ等にも勝れて解脱速かなりとは如何。これに對して法然様は、念佛の勝れた理由を、萬機普益の故に、萬徳圓滿の故に、稱へ易き故に、持ち易き故に、時に契ふ故にこの五つの理りを擧げて、彌陀の本願の勝れたり云ふことを諄々御述べあらせられた。それから第二番永辨、第三番智海、第四番靜嚴、第五番明遍、第六番貞慶、第七

顯真僧  
正の問  
ひ

番證眞、第八番顯眞、第九番湛譽、第十番重源、第十一番顯眞、第十二番永辨と順を追ふて問答に及ばれた。

今この一々の問答をお話して居れば仲々長くなり、問答だけでも十四五席を費すこぢやで十二の問答の總名代に一番最後の永辨の問答だけを御取次いたしたいと思ふのぢや。この永辨僧都の問ひはお互ひの日ぐらしに付て最もよい惡人正機の問答ぢや。

さて永辨僧都は、

「如何に法然殿、段々淨土の法門も承りて略ぼ領解なられましたか、併し彌陀の本願は惡人正機で善人よりは惡人男子よりは女人と、至つて罪の深い者程却つて御目當で如何にも御慈悲深う御座ります、併し其所が少し心得難いので、少しでも罪の重い

永辨僧  
都の問  
答



者を救ふと云ふ深重の思召の程は分つてあるのですが、そう聞  
けば罪の重ひ程彌陀の御心に契ひ、罪造つても助けようごあれ  
ば、只でさへ造り易ひ凡夫悪いここをしたがる機が、罪は如何  
程造つてもかまはぬ、それが彌陀のお慈悲ちやと云はゞ却つて  
罪を多く造るで御座らう、又佛法は何れへ參つても罪は造つて  
も大事ないと云ふ教へはなからうと思はれます、此義如何で御  
座りましやう。』

これは永辨僧都が心から出た疑ひである、浄土の法門、彌陀の御  
慈悲が十分解らぬと屹度斯う云ふ不審が起るのぢや。これに對して  
法然様の御答辯が誠に有難い、七百年昔の大原問答の席で、永辨僧  
都へ御答へなされたと思はず、今日在座のお互ひへ法然様の直々の

御化導と思ふて頂かねばなりませぬぞや。

即ち法然様は

『されば諸惡莫作、衆善奉行とは諸佛の通誡ぢや、悪いここはせ  
よと云ふ教へが何れに御座らう、今彌陀の法門でも必ず惡は造  
るなで御座る、併しそこちや、彌陀の本願は易行の本願ぢや、  
これが彌陀の慈悲ぢや、そこで惡を造つた者は助けぬとは仰つ  
しやらぬ、十惡の惡人、五逆の罪人も助かります、五逆十惡具  
諸不善、忽ち惡を轉じて佛果を得ます、實に手早ひ丈夫な御法  
で御座る、併し一體が凡夫の自性として惡を起すことが所詮止  
まらぬ、これは生れつき、過去遠々の持ち料で御座る、それを  
無理に止めよと云ふなれば、それは決して易行他力の法門とは



申されぬ、淨土門とは名づけられませぬ、止めても止まらぬ惡業故に阿彌陀如來は深重の大慈大悲は爰のことで、惡に染みついた凡夫を見込んでそのまゝ、助けようこの御本願故に、諸佛に超へ過ぎたる不思議の殊勝の南無阿彌陀佛なり、それぢやに由りて惡を作つた者でも回心懺悔して本願にムツと縋る——親を殺した者も、佛を仇とした者も成佛するに相違は御座らぬ、由つて惡人正機の本願と申すので御座る、又佛法を修行する身になつてからは惡は造られぬ、惡を止めて彌陀に縋らねばならぬ、又名號が勝れたと云ふてそれにもたれて惡を造りては念佛申したとてそれでは頓と益には立ぬ、善導は隨犯隨懺、念々稱名常懺悔と仰せられて、罪を消す爲めに申したり、惡を造つて

も念佛にまかせたりするは當流の本意ではない、佛の内證に契はぬ、然らば何と心得てなれば、念佛行者の身になつては隨分惡は慎んだがよい、先づやがては慈悲第一の佛になるのではないか、さすれば惡作るやうなことはならぬ、念佛が尊いと云ふて惡を造るのは藥があるて毒を好むやうなもの、十惡五逆も助かること知つて而も少罪も犯してはならぬ、されば惡人御目當なればわが身は惡き徒ら者、無有出離之縁の身の上ぞ、永不成佛とわが身を見局り、只頼むべきは阿彌陀如來とヒシと彼尊の御袖に縋りつき念佛申す身の上となれば惡は造られまい、これにて惡人正機の本願が承知が出来たであらう。』

と仰つしやつて、彌陀の本願の根本の所を懇ろに御示しなされた。



サア御一同に此ぢや、悪人正機の御本願を取り違へぬやうにせ  
られたい、中には悪人正機の御本願を聞き違へて折角の御慈悲に  
泥ぬる同行がありますぞや、

「コレ／＼お虎さん、今日の御説教聞きなされたか、有難い御慈  
悲ぢやないかいな、彌陀の本願は悪人正機で、悪いことする程  
却つて御氣に召すのぢやげな。」

「ハイ／＼、お琴さんの云ひなさる通りぢや、一念歸命の時にモ  
ウ臨終までの罪は消して下さるのぢやげな、スルここれからは  
もう罪は造り放題、罪の造り徳ぢや、罪は御勝手次第云ふキ  
ツヒ御慈悲ぢや、これからはお互ひに情夫もしよう、男と見た  
りや離すまい、離れまい。」

「これ／＼お虎さん、情夫位ではまだ手緩ひ、他人が知らずば盗  
みもしようぢやないかいな。」

恚懣心得違ひして貰ふては大變ぢや、折角の御宗旨に瑾がつきます  
ぞや。

大體佛法者ごなるご因果ご云ふことが知れる、この因果ご云ふこ  
ごが辨へられるご第一出来ぬのが殺生ぢや、諺にも一寸の虫にも五  
分の魂ご云ふて一切の生きのある者に命を惜まぬものは更々ない、  
先づお互ひの身の上で考へてみられよ、誰一人ごして私は生命は入  
りませぬご云ふ人が一人ごしてあるか、自分の命の惜しいごから  
考へてみれば殺生はならぬ、併し人間は事ご品ごに由る時は承知の  
上で大切な生命も差出すごもあるが、鳥類畜類は只もう生命が惜



しいばかり、それが捕へられて死ぬる時は一向物を言はぬと思はれ  
ようが、仲々そうではない、一切の物が殺される時には實に泣死  
や、すれば殺生と云ふものは實に罪なもので必ずその酬ひはなけ  
ばならぬ、その酬ひには順現業、順次業、順後受業、順不定業とい  
ろくの差別はあるけれども遠いか近いかは一度は酬はずば置かぬ  
斯うしてみれば仇にも殺生は出来ぬ、而し殺生ばかりが悪ぢやない  
何れの悪も悪名名をついた以上は善いことは一つこしてない、苟も  
念佛申す身の上ならつゝしみく御冥慮に耻ぢ入り日ぐらしせら  
れたきこぢや。

第二十席

大原問答の影響

さて大原問答も第十二番目に出て悪人正機の問ひを起された永辨  
僧都で大體終りを告げた。遠が初めは我慢偏執の勢ひ強く、法然上  
人のお弘めなざる、浄土門念佛宗は勝れたか勝れぬか、一と不審打  
つて若し聖道門より少しでも劣つてあつたなら、法然房の鼻を挫き  
念佛宗を取り毀して呉れよう、如何な浄土門でもこの四ヶ大乘より  
は勝れはせまいと腕をさすりて来た人もあり、又中にはかねて出  
離の一大事を心掛けてまします御方はこの度法然上人が念佛宗を立  
て、末世相應の凡夫往生の看板を打つて弘め給ふはわれくが出離  
の道なるべし、この様子をくはしく御尋ね申して御指南に預からん  
ご集つた人もある。

それで先づ交へられた問答數は最初から十二問答、一々法然様が



二〇八

御返答まします所、誠に浄土門は聖道門より勝れ、これぞ釋迦出世の本懐ぞ。經論の教へを引いて御答へなさる、故、一々最も、心得られ、殊に現世證得の問答に至りては智慧利根なる者は今生で證る、この娑婆で證るに立てた聖道門は即身成佛と談じ乍ら現在の肉身で成佛する者はないではないか、それに引き換へて浄土門には却つて即身成佛ありと聞いてみれば、遠が我慢偏執の角も折れて成程、彌陀の本願は聖道門よりは勝れてある、凡夫往生と看板立て、御弘めなさる、も無理ならぬこと、皆々歸伏の思召のある所へ、本性上人が報土化土の問答、これでいよく、凡夫が直ちに報土へ參るご云ふことを聞いて打ち仰いで居らる、折柄、又々俊成坊重源の無生而生の問答でいよく、聖道門よりは勝る、と思ふ所へ、顯眞僧

二〇九

正の他作自受の問答で他力ご云ふことが聽聞出來て、有難いと思はる、所へ、最後に永辨僧都の惡人正機の問答が出て、彌陀の本願こそ本爲凡夫兼爲聖人、罪のある者を目當として助けようごある、餘佛に勝れた法門ご聞けば聞く程有難い味が出て、三百八十餘人の碩學も膝を屈して御歸依なされ、一千餘人の隨聞者も實に御最も道理に伏し、誠に尊い御本願、このみのりでなければ末代の凡夫は救はれまいご皆々御歸依なされた。この時顯眞僧正は

「上來、くはしく御答へ下されまして、他力の本願の妙味を味ふここが出来ました、併し疑ふでは御座りませぬが、成り得ることならその念佛の勝れた徳の程を御示し下されたならば一入有難う御座ります。」

法然上人御一代記說教上



ご御願ひなされた。これをお聞きなされ法然様は最もな願ひご思召し

「この源空も幼少より出家して諸抄に眼を曝し出離の法門あるやごみれごも成佛の捷徑なく、老衰の今場に至るまで一代經を繰り返し、極大乘の法門には即身成佛ごあれば、いろくご觀念を凝し、工夫を回らし或は三密の床に上り瑜伽瑜祇の觀法をして眞如の月を宿さんごすれば妄念の雲忽ち起り、法性の水を平にせんごすれば、五塵六欲の浪靜かならず、唯恨むらくは成佛の捷徑もなきかご、それより一代經を五度まで繰り返し、善導の疏を入たび巻き返し、その中散善義を見れば、一心專念彌陀名號、行住座臥不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、願

彼佛願故云ふ文あり、この文を見出した時には實に横手を拍つて、さてく有難や、今云ふ今は永年の願望成就、さては末世の凡夫が安々往生遂ぐるは彌陀の本願他力不思議の名號ぞ今までは斯かる有難い名號ごは知らなんだ、彼の佛願に順ずるが故にごは、まるく他力、自力の計ひは少しもない、この他力の妙味を知つたのはこの源空の四十三の時なり、それよりフツツリご自力をすて、觀念をすて、ムズミ彌陀に縋りて念佛申し、凡夫往生の看板打つて弘めたるはこの理由あるなり。」  
ご、御自分が自力をすて、他力にお入りなされたくはしい經路を御はなしなされ、各々も萬望他力に縋つて念佛せられよご仰せられたこの時法然様は、昨日今日まで聖道門であつた人々が今一應淨土



門の教へを聞いたとて直ぐには會得が出来まいと思召して、それから御本尊に向はせられて、あはれ聖道門の人々が浄土門の法門に疑ひ晴れまするやう、何卒不思議をあらはして見せ給へ、偏へに證據を明し給へご一心に御本尊の彌陀に願ひ給へば、不思議や御本尊は木佛であるが、その御木佛から光明赫々ご放ち給ひ、法然上人を照し給ひ、左の御足を前へ踏み出し給へば、それを御覽になつた顯眞僧正、永辨僧都、本性上人、智海法印、解脱上人などのお歴々を初めごして二千餘人の人々に至るまで歡喜の涙に咽んで喜び給ふ所、法然様は、何卒末世までその御足を其通りになされて念佛の證據ご遊ばされたいご御願ひなされたれば、今でも大原の立禪寺の本尊は踏出しの阿彌陀ご申して左の足を蓮華の外へ踏み出して御座る。

御一同よ、この大原までへは七條のステーションからは四里足らず、而も電車の便があつて歩くのはホンの一里餘りぢや、京都へ參詣の序に參つてお出なされ。さてこの奇瑞でいよく念佛往生に疑ひ晴らされ、其彌陀の脇を行道せんごて一同に唱名念佛し法然様を始めごして本尊のグルリを周り給ふに外から風が吹いて来て内陣の燈明は一燈も残らず消へたがそれでも日中よりも明るい、不思議ご見れば法然様の御頭から赫々ご光明を照し給ふ、その光明は御頭の後ろに圓輪になつて耀く、後ろから拜めば勢至菩薩、前から見れば法然様、さては法然様はいよく勢至菩薩の御化身ぢや、殊勝な筈ぢやごますく御歸依なされ、それから彼尊を高座に請じ香華を供へ、顯眞僧正を初めごして皆々が念佛もろごもに焼香なされ、本地



勢至菩薩垂迹源空上人、何卒未來の迷闇照し給へご禮拜せられ悉く御歸依なされたごある、誠に目に見るやうに思はれて有難いでは御座らぬか。

第二十一席

立教開宗の苦辛

引續いて御取次に及ぶ法然上人の御傳、音に名高い大原問答も始終に涉つて十二の對問、一々が悉く淨土門の肝要な目抜きばかりの所ぢやが、法然様は是等に向はせられて經論を御引きなされて御叮嚀に御返答なされたので、成程淨土門は聖道門よりは遙かに勝れてこれぞ末世相應の要法ぞご領かれ、この大問答も遂には法然上人の勝利となり、今度の發頭人たる顯眞僧正を初めごして永辨、智海等

熊谷鉈  
をすて  
る

の大學者が一樣に念佛門に歸依なされ、即ち本堂内陣にて行道しその終りには法然様を高座に請じ、香を焚き禮拜して、本地勢至菩薩垂迹源空上人ご一々御敬ひなされたごは前席に述べた通りぢや。今まで大きな鉈を振つて力んで居つた熊谷もこの態を見て最早やこの鉈も要事はないご、そのまゝ近所の藪の中へ捨て、了ふた、只今でも大原へ行くご熊谷の鉈捨藪ご云ふのが残つてある。

何を申してもその時分には四ヶ大乘の羽振のよい時節であるのに法然様が獨り念佛は四ヶ大乘よりも勝れてあるご看板打つて淨土門御建立ぢやで、仲には十分偏執の人もあり、稀には信ずる學者もないてはなかつたが、思ひも寄らぬ大原問答が起り、二千餘人の學者を對手ごして法然様御一人での受け對へ、實に日本初めての大問答



であつたがマンマと法然様の御勝利となりてその大勢の方をば弟子  
ごせられたのちやでこれまでよりは百倍すぐれて御繁昌ちや。

何でも物の初めご云ふは仲々難つかしいもので實に人の知らぬ苦  
勞をせねばならぬ。昔から創業なり難くご申して仇や愚かて一つの  
事業が成り立つものではない。されば釋迦如來でさへ提婆ご云ふ惡  
人が居つていろく妨げをするものちやで、佛法弘めさせ給ふには  
容易ならぬ御苦勞をなされた。又わが日本の國では聖德太子が初め  
て佛法を御弘めなさるゝ時には、守屋ご云ふ外道が是亦いろく妨  
げをした。

聖德太子が佛法御弘通なさるゝご聞かや、物部守屋は中臣勝海ご  
相談して、寺を焼く佛像を毀す、僧尼を殺す、あらん限りの亂暴狼

藉をしたのちや。それでもまだ不足に思ふて河内國稻村ご云ふ所に  
城廓を構へて軍陣を張り、近畿の惡徒を集めて聖德太子に又向ふた  
のちや。その時太子様は御年僅か十六歳であつたが止むなく將士を  
引率なされて稻村の城をお攻めになつた、けれども守屋方は軍勢數  
多にしてその勢ひ甚だ強く、それが爲め官軍の方は度々ヒケを取り  
兵士はムザく死ぬる、殘る者は傷きなごして遂には太子様の御身  
まで危急が逼りて來たのちや、守屋は今一刀で太子様に惡逆の刃を  
加へようごした時に大きな椋の樹があつて、急にそれが兩斷され  
て太子様を馬もろごにも御庇へした、これが爲め太子様は危い場所  
を免れさせられたのちや、この時太子様は喜ばせられて、

神妙椋樹悲母木

我身出生廣大恩

法然上人御一代記説教上



紹隆佛法今成就

日月影向不退轉

ご述べさせられたが、これより信貴山に登らせられ四天王の像を造り給ふて甲に納め、この軍に勝つを得ば四天王寺を建立せんご冥助を祈らせられて、いよく七月三日未明に信貴山を出でさせられて守屋を攻めんご給ふに、途にて忽然として一人の貴女現れ、その手から一本の鏑矢を渡して、これこそは魔王降伏の寶箭に候、これにて法敵退治し給へご、その矢を太子様に渡すご共に何所ごもなく隠れて了ふた。

これを目撃した將士は喜び勇んで攻めかけたが、敵は前日に劣らぬ素晴らしい勢ひで、矢を射るごは宛然雨のやうちやが、不思議にもその矢は悉く横の方へ外づれて了ふて官軍へは當らぬ。これを

守屋詳  
せらる

見た守屋はもごかしがりて大きな榎の木に登り、高い所から太子様を射殺さんごしたご、計らずも一本の矢が足に當つたのでそのまゝ榎の木から落ちるごこれを御覽なされた太子様は侍臣に命じてかねて貴女の手渡した鏑矢を射さし給へば、過またず守屋の胸板を貫き忽ち斃れたので、秦川勝はその首を刎ね落し池の水にて洗ひこれを太子様に捧げた、この時太子様はこれを御覽せさせ給ふて

如我昔所願

今者已満足

化一切衆生

皆令入佛道

ご仰せられた、この太子様を庇ふたご云ふ棕の樹も、守屋の首洗池も、守屋の墓も、河内の八尾在の勝軍寺ご云ふお寺の境内にあるから志のある方は一度參詣して太子様の御苦勞の程を味ふて頂きたい



今、法然様が四ヶ大乘の眞盛りな中へ他力で参れるご云ふ浄土門をお開き下さるゝにつけては實に命かけての御苦勞であつたのぢやこの御難義があつてこそお互ひはやすく聴聞し、やすく念佛し心やすう浄土参りをさせて頂くのは、ひごへに彼尊の御苦勞のあらはれご存ぜられたら、その御禮報謝は外事は入らぬ、彌陀をたのみ念佛申し、わが身くの後生の一大事に安心の身の上ごなられてぞ二つごない御恩報盡ご申すものぢや。

第二十二席 護摩堂禪尼ご明遍僧都

追々御取次に及ぶ元祖法然上人の御傳記、大原問答の席に於て二千餘人の聖道の學者方を對手ごなされ、問ひつ問はれつ、一々御返

答あらせられて遠がの學者方も一時に御歸依なされたごは聴聞せられた通りぢや。

所がこの大原問答の發頭人である顯眞僧正には一人の妹があつて護摩堂禪尼ご云ふ方ぢや、顯眞僧正がこの大原問答のあつた年の冬ぢや、わざく護摩堂禪尼の元へ手紙をつかはされたごがあるが味ふてみるご實に有難い。

大原消息

われ佛を念ずれば佛われを照し給ふ、光明われを照せば罪障を消さずご云ふごごなし、藥王樹に觸るゝものは毒ごいへごも藥ごなる、光を蒙りてんものは誰か罪障残りあらん、こればかりの易行を無數劫の間をもひよらざりける悲しさよ、時過ぐる



智慧禪定を修せんよりも利益現在なる光明名號を稱念すべし、  
 一行即ち一切行なれば念佛一行に諸行こそく納り一念即ち  
 無量念なれば一稱彌陀何の不足かあらん、法界宮に入らんと思  
 はゞ極樂の東門より入れ法身の體を證せんと思はゞ彌陀の名號  
 を唱ふべし、道綽は講説を捨て、一向に念佛になり、善導は雜  
 行を嫌ひて專修をすゝむ、占蔔の林に入ぬれば餘香を嗅がず、  
 淨名の室に入ぬれば功德の香をのみ嗅ぎこの山に入らん人は唯  
 念佛の香をのみぞかく、念佛の聲のみきくことになし候はずや

文治二年十二月二十九日

法印顯眞

護摩堂の尼御前

われ佛を念ずれば佛われを照し給ふとは善導大師の御言を述べら  
 れたのちや、彌陀の本願は稱ふる者を迎へ取らんと思はせられたる  
 誓願なれば一念歸命の當體に早や攝取の光明の中に攝め取らるゝ念  
 佛行者ちや故に佛われを照し給ふと云はれたのちや。光明我を照せ  
 ば罪障を消さずと云ふことなしとは、一念歸命の當體に三世の業障  
 みな消滅して正定聚に至ることである。藥王樹にふる者は毒いへ  
 ごも藥なることは、本願に向へばこの機で疑ふた者が、この機故に  
 頼まれるやうになり、煩惱即ち菩提喜びの因なる、今までは本願  
 を疑ふた者が罪深く如來を頼む身となるなり。一々これを解いて申  
 せば長くなるでこれ位で止して置くが、これを見ても怎のやうに顯  
 眞僧正が法然様に歸依せられ、大原問答の機能があつたか云ふこ



こが分かる、この便りの返事として護摩堂の禪尼が歌を詠んでよこされた、

一心に釋迦も阿彌陀もはなれねば

外に求むるみのりやはある

高野の明遍僧都さいへば仲々名高い御出家で、蓮華谷に引籠りて時の御天子様の御召しにも辭退せられた程の方で、一心に觀念を凝らして居られたけれども欲界散地の悲しさには峰を拂ふ松風の音を聞いても心が動き、岩間を流るゝ水のひゞきを聞いても心が散る追がの御大徳も心が亂れてならぬ、それはその筈ぢや、この土は欲界散地の土地柄ぢやから當りまへぢや。然る所この度大原問答の席へ出られて念佛門の勝れたここを聞かせられ 彌陀の本願の尊きここ

を喜んで居られたが、その後法然様の御撰述の選擇集を御覽なされて偏執のある書物ぢやと思ふて居られたらその夜不思議の靈夢をみられた僧都が難波の天王寺へ御參りなされたら、非人乞食而かもごれもく大病人らしい、頭の髪は蓬の如く體は瘦せ衰へて、今にも死にそうな大病人が五六百人枕を並べて寝て居る、これを御覽じた明遍僧都はさても、不愼な病人よ、孤獨者のあはれさよご思召して獨り涙を流して不愼がりて御座る所へ、一人の出家が墨染の法衣をつけて、ヒヨコリくご御出になつて、その枕を並べて居る病人の枕元へ立ち寄りて、一人く湯を吞まして居らるゝ、これを見られた明遍僧都はさても、奇特な御出家ぢや、そもこの御出家は何人におはしますやらごその由御尋ねになるご、その出家はわれこそは



吉水の法然房なりと答へさせられたかと思ふたらボツチリ夢が醒めた。

明遍僧都はこの夢をつらく判じなさるのに、病人も輕症の間は桃よ密柑よといろく食物が喉を通れど、大病人になるごもう他の物は通らぬ、漉湯を吞ますより外はない。正法像法の時季のよい間は病ひの輕いも同前ちやで華天密禪の桃や密柑の菓物も食へるけれども五濁亂漫の衆生、無明煩惱の大病人には迎も眞言止觀の固い食物は食はれぬ故に南無阿彌陀佛の漉湯より外はない、これ機法相應して生死をはなる、御法ぞ、難治の病人にはこの頓味より外はあるまい、さてく念佛の尊やなご、それから法然上人のお弟子となり、念佛の行者ごなられ日出度往生の素懷を遂げられたごある。

明遍僧  
都弟子  
さなら  
る

法然上人御一代記説教上

天王寺の西門に居た度せ衰へた病人ごは餘人にあらず在座のお互ひちや、末法濁亂の今日、四重五逆の病ひ盛なれば、三界流轉の野原へ捨てられ、諸佛の御力にも仲々叶はざる時なり、迎も便にする者のない大病人なり、意念觀念の桃も、智慧學問の柿も食ふことの叶はぬ故に、只口開いて吞むばかりの南無阿彌陀佛の漉湯より外は通らぬ、斯麼ありがたい法を聞きながら、それでもくご法を疑ひ機を危んで居られよう道理はあるまい、そのまゝ受取るごの大悲の約束、心配も入らぬ遠慮も入らぬ、南無の口を開いて、阿彌陀佛を吞み込めばその時往生治定し、そのまゝ命終るごも華降る蓮臺へ往生、若し命のふれば自然ご多念に及び相續念佛のつごめごなり有難やくご御恩の稱名もろ共に日ぐらしせらるゝ身の上ごなる。何れ



二二八  
を承つても永劫わが身の果報なれば御恩の程を思ひ浮へて南無阿彌陀佛く。

### 第二十三席

#### 熊谷發心の因縁

さて相續いて御取次に及ぶ法然上人傳、今席は熊谷直實が發心因縁の由來を御はなしに及ぶ。時は元暦元年二月六日、九郎判官義經は鷲尾義春を先導して鴨越から一の谷へ逆落しに攻めかけたので、追が要害堅固と恃んで居た平家も不意打ちを喰ふて、上を下へと狼狽するばかり、只われもくご船に乗りて海を遁れんと汀に落ち行くばかりぢや。

この時熊谷直實は好き敵に組み打ちて今日の譽れにあづからんご

熊谷  
敦盛卿

熊谷  
敦盛卿を  
組伏せ

汀に立ちて東西を窺ふて居た所へ無官太夫敦盛卿は紺錦の直垂に萌黄匂ひの鎧に白星の甲着て、搦毛の馬に乗り給ひ、只一騎で新中納言知盛卿の舟へ志して行き給ふた、これを見た直實は、イザ御座んなれ、好き敵にこそごサツト馬に鞭あて、オーイ、返し給へやく、斯く申すは日本一の剛の者坂東次郎熊谷直實ぞと呼びかくれば、敦盛卿は馬を返し給へば浪打ち際に馬ご馬ごを馳せ並へ取り組み、上になり下になり二三度轉んだが、何を申すも敦盛卿は幼若熊谷は隠れなき剛の者、敦盛卿は不甲斐なくも組み伏せられ給ひければ、熊谷は腰なる一刀抜き放ち、イザ首打んご内甲を覗きければ天晴の剛の者ご思ひきや、僅か十六七の若上臈、その上薄化粧して槩水黒々、このやさしい姿をみた熊谷は、あな無慙やな、弓矢取る



身の口惜しさ、この若上藤の何所へ刃が當てられよう、

「そも御身は誰人のお子にましますや。」

ご問ければ、敦盛卿は何も云はず只

「疾く切れ。」

ご宣ふばかり、熊谷は

「斬り奉りて雑人の中へ捨て置かんも便なきわざに候、聊か存ずる次第もあれば御名を名乗らせ給へ。」

「存ずる旨あるごならば聞かすべし、われこそは故太政入道の弟修理太夫經盛の末子無官太夫敦盛にて生年十六なり。」

これを聞いた熊谷は思はず涙を流し、

「あなあさましや、さては伴小次郎ご同年なるか、小次郎が今朝

の戦ひに淺疵を受けてさへ親の心は痛ましうてならぬに、焼野の雉子夜の鶴、かゝるやさしき人を失ひ奉らば御父母の慨はいかばかり、疾くより此方は日本一の剛の者ご名乗り居るに逃げ給へばよきものを、武門の恥を知り給ふて取り返し給ふ雄々しさよ、覺悟し給ひしこの姿のいちらしさ。」

熊谷は打つに打たれず、助くに助けられず、日本一の剛の者ご名乗りを上げた熊谷も追が義理ご情に挟まれて、思はず鎧の袖を濡りたけれご熊谷は一の谷にて現に組み伏せた敵を逃したりご云はれては二心あるかご疑はれ、且つは弓矢取る身の子孫に傳へての恥辱なりご思ひ返し、

「助け参らせたくは存ずれごも今や源家の兵は陸に満ち充つれば



迎も遁れ給ふべき御身にあらず、首打ち參らせばこの熊谷も出家得度いたし必ず御菩提弔ふべし、順縁逆縁共に菩提、未來は必ず一蓮托生、少時娑婆では敵味方に分れども人生僅か五十年、浄土の再會期し給へ。」

高く双を振り上ぐれば、敦盛卿はいちらしくも優しくも両手を合して西に向き、

「ア、愚かや熊谷、悪人の友を捨て善人の敵を招けよはこの事、早首打つて後の回向をたのむ、南無阿彌陀佛く。」

このいぢらしい姿を見た熊谷は萬感胸を突き、肉を扶らるゝ思ひ「あゝ、弓矢執る身の苦しさよ、この熊谷は犬畜生よ人非人……。」熊谷の兩眼からはハラ／＼と玉のやうな涙が地に落ちて、振り上げ

熊谷敦盛卿の首を打つ

た双を投げ捨て、泣き伏した。

この時陸では源氏の兵が口々に熊谷を罵るので、今は猶豫すべきにあらずと臍を決め

「ア、是非もなしお免し召され、南無阿彌陀佛。」

首は前にぞ落ちた。涙ながらに今打ち取つた亡き骸の腰のあたりをみれば香の高い錦の袋に入れたる一竿の笛があつた、熊谷は件の笛と首を捧げて城中の小次郎の許に行き、

「これを見よ、修理大夫殿の御子無官大夫敦盛卿にて生年十六歳と名乗り給へば助け奉らばやと思ひつれど、汝等が弓矢の末を思ふて憂き目の悲しきをみて首を頂きぬ、直實たごひ世に亡き數に入るごも後世菩提を弔ひ申せ。」



熊谷はつらく世の有様を案ずるに、愚かなる禽獸虫魚に至るまで親として子を思はぬはあるまい、災災の中に身を亡し、矢先に當りて身を失ふも只子を思ふ情けよりするのぢや。さり乍ら陽炎のあるかなきかの身を持ちて何思ふべき世の末ぞ、あゝこれ程美しい上臈を失はれたる父母の胸の中は怎であらう。

來し方行く末を思ひ回らせば便なき浮世かな、驕る平民も二十年妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、功名富貴何かせん、榮達を計り名利に血迷ひし心こそ口惜しけれ、人の親を泣かし罪なき花の蕾を散らしたこの熊谷は鬼であつたか大蛇であつたか、虎狼にひこしい今の振舞、未來は決定必定無間の釜底、あゝ怖しやく、イザ妄念の警切り捨て菩提の道を求めんご、日本一の剛の者、鬼を欺く熊谷

も宿縁此に宿し、九郎曹司に永の暇を貰ふて華洛さして上つた。これよりいよく法然様の御庵室に訪ね入るのぢやが、長席の恐れあり、少時息を休めて次席にゆづる。

第二十四席

熊谷吉水の禪房に入る

上來聽聞に及ぶ法然上人御傳記説教、前席では熊谷が敦盛卿の首打つて、いよく出家に志したご云ふまで御取次に及んだが、さていよく華洛に上つた熊谷は、よきお師匠様を見出して菩提の道知るべにしようご彼方此方ご尋ねて歩き、法然上人の上足の弟子安居院の聖覺法印を尋ねた。

「阪東の熊谷次郎直實ご申す者、この度世の非常を證り弓矢をす



て、墨染の身にならんごて參上仕り候、あはれ願くば菩提のよき道説き教へ給へ。」

若き法師はこの旨聖覺法印に通じた、聖覺法印はやがて熊谷を客殿に請じて對せられたれば、熊谷は拜謝して、

「われ武門に生れ、幼少より干戈を振り、甲冑を身にまこひ、源平の合戦に多くの人を殺害し、軍陣を攻め破り首を取るごご數知れず、種々の惡業は山よりも高く海よりも深く候、されば並々のここにては成佛すべき身に候はず、腹をも裂き破り、腸をも洗ひ、手足を斷ちてなりごも助かるべき道の在はさば教へ給はれよ。」

熊谷が熱心に申述べたので、天晴求法の心の堅固なるのに聖覺法印

も感心し、それから生死事大、流轉輪廻の迷ひ恐しきより、遇ひ難き彌陀の本願、信じて證りやすき念佛の入門を懇ろに教へて、猶安心の一段に於ては吉水の法然上人に尋ねべしと教へた。

熊谷は教へられたまゝ、吉水の禪室に法然上人を訪ね、

「阪東の熊谷次郎直實ご申す者に候、殊勝な上人の御名を聞き尋ね参りたり、御在庵に候はゞ一往拜謁ゆるされたし、御取次たのむ。」

敷居に出た若き法師は、少時待たれよと奥へ入つた、スルミ熊谷はソト懷中から短刀取り出して、お庭先の滑かな石に當て、磨き初めた。

これを見た吉水のお弟子方は吃驚仰天、彼こそは武藏國の住人、



熊谷次郎直實にて源氏の中にも名の轟いた剛な者、今師に面謁を乞ふた上、あの短刀を磨ぐのはヨモ碌ではあるまい、師の御身の上に大事を加ふる覺悟にやご、取りづくに尊して皆戦き慄ふて居る。

やがて此方へご案内に導かれつゝ客殿に足を運ぶご、法然様は慈悲忍辱の顔に念佛稱へくお出ましあらせられ、

「かねて聞き及びたる熊谷次郎ごは和殿なるか、斯くまめやかに菩提心を發し給ふこそこれ凡愚の所爲にあらず、これみな如来大悲の御手回しにこそ、必ず疎かに思ひ給ふべからず、彌陀の本願は罪業の深重こそ正客なれ、只南無阿彌陀佛ご信じて稱ふる外仔細入らず、そのまゝ攝取の大益を得奉るなり、ゆめ疑ふべからず、南無阿彌陀佛く。」

ご、彌陀の本願、六字のいはれを懇ろに教へ給ふを聞いた熊谷は大聲あげて足摺りして泣き出した、これを御覽じて法然様は、

「和殿は何故泣かる。」

問はれて熊谷は

「私のやうな極重悪人は、頭を碎き、足手をも斬りすて、こそ後生は助らんご思ひ侍り先程御庭先にてこの懐劍を磨ぎすまし、お師匠様の目の前で手足を剥ぎ取らうご覺悟して参りましたに今お師匠様の御言を承れば、手もぬらさず、足も濡らさず、只南無阿彌陀佛ご信じて疑はずはこの悪人がこのまゝ助かりますこの御言、されば磨いて参りましたこの双も今は無用で御座ります、あゝ有難い、あゝ嬉しい、もうこの熊谷はこのまゝ佛に



さして頂けます、これがお師匠様泣かずに居られまじょうか、  
御無禮の段重々許させ給へ。』

卒直な熊谷は易行の本願が聞へたので泣いて喜んだとある。サア  
御一同もこの喜びがなければならぬ筈ぢや、家をすて身をすて、  
難行苦行して来いぢやない、只信する一念にお助けぢやもの、こ  
れが喜ばずに居られようか。

斯くて熊谷は法然様のお弟子となり、法名を法力房蓮生と下され  
多年の宿望全く成就してその喜び一方ならず、昨日まで甲冑つけた  
身は忽ち墨染の入道と變じ、日本一の剛の者ご名乗つた口からは南  
無阿彌陀佛の唱名の聲絶へ間なく、敵の生首搔き落した手には水晶  
の念珠もいちらしく、元より大膽不敵の強の者だけありて、佛門に

入つてからでも勇猛精進にて更に倦まず、卒直にして少しも飾り氣  
のない者だけで、只々法然様の仰せを眞受けして佛道の行ひもまめ  
やかなので、法然様も深く可愛がらせ給ひ、法力房よ、蓮生房よご  
て常に側近く置かせられたと云ふことぢや。

この熊谷は中年過ぎてから佛道に入つた人だけで左程學問はな  
つたけれども往生の信心は堅固なもので、信行兩座の時にも遅れ走  
せに參じ乍ら直ぐに信の座につかれたことは御一同も既に聽聞の通  
りぢや、才覺で信するにあらず、智慧で參る淨土ぢやない、信じて  
稱ふる者を迎へ取らうとの勅命、この勅命一つが眞受けになられた  
らその當體に早や正定不退の分人、そのまゝ命終ることもお待ちかね  
の御淨土へ參らせて頂くのぢや。



第二十五席

關白家に於ける熊谷法師

追々席を重ねて聽聞に及ぶ法然上人傳、さて時の關白兼實公は深く法然上人へ御歸依のあまり時にはわざ／＼御邸の方へ御師匠様を御招待あらせられた。

丁度、熊谷が出家してお弟子となつた秋であつた。兼實公からの御招待で法然様は御邸へ御出蒐けなされた。

これを聞いた熊谷は是非お供させて頂きたいとお願ひ申上たが、法然様はまだ今道心で禮儀に習はねば萬が一にも先方の御邸で粗忽があつては關白様に對して申譯がないと思召し、「その儀に及ばぬ。」

上人關  
白家へ  
趣かる

熊谷關  
白家へ  
お伴す  
る

さて御承知なされなんだが、是非にお供をご強いての熊谷の頼みで法然様も否みかね給ひ、お供につれて關白家へ御上りなされた。

何を申しても天下第一の人、關白様のお邸であるから仲々廣々したものぢや。法然様は直ぐに奥の座敷へお通りなされたが、お供の熊谷は悲しいここには奥へは這入れぬ、大玄關の次の間に差し控へて居た。

少時するご、奥の座敷では法然様の御説法が始まつたらしい、お言葉は分らぬがお師匠様の御聲のはし／＼が壁を通して時々玄關へ傳つて来る。

熊谷は飾り氣のない男だけで短氣な癩癪持ちや、併し後生を喜ぶ心は仲々熱心なものぢや、奥の方でお師匠様の御聲がするので、何



二四四  
ごかしてタトヒ一言なりごも御説法が承りたいご襖の隙目へ耳を當  
てたり、戸口へ立ち上つたりして聞うごしたごが、仲々廣々したお邸  
ちや故に、間敷ご距りが遠いので怎しても聞くごごが出来ぬ。熊谷  
はそれが残念でくならぬ、強いてお供を願ふたのも御説法が聞き  
たさぢや。

そこで熊谷は大音聲あげて、ワザと奥へ突き通るやうな獨り言し  
て申すやう、

『厭離穢土、欣求淨土ご佛も説かせられたごが、さてくこの娑婆  
程口惜しい所はあるまい、法を聞くさへ、無官の熊谷は奥へも  
通れず、御師匠様の御勸化も思ふやうに聞くごごが叶はぬごは  
無念なごごで御座る、やがて淨土へ參つたら恁麼分けへだては

あるまいに、あゝ五月蠅娑婆ぐらしぢや、南無阿彌陀佛く。』  
ご、銅羅聲を張り上げて叫んだので、先づ法然様は冷汗を流し給ひ  
案に違はぬ蓮生の粗忽者、これは何ごしたらよからうご、モチく  
して御出になるご、兼實公はこれを聞き咎めさせられ、

『あれは何者で御座る。』

ご、御尋ねなされたので、法然様は止むを得ず、

『彼は近頃阪東より上りたる今道心の熊谷ご申す者なり、東育ち  
の武骨漢、若しや無禮があつてはご存じ強いて伴れずにご存せ  
しが是非にごの所望にて連れ參りしが、案に違はぬあの無禮、  
何卒ゆるしめされ。』

かねて關白様もその噂をお聞きになつて居られたので、



「さては彼れが熊谷で御座るか、やさしくもいちらしくも候、仔細なくば召させ給へ。」

ご、仰せられたので、法然様はこれを熊谷へ通じ給ふたので、熊谷は天へも登る心地して、喜び勇んで、ツカ／＼と奥御殿へ通つた。

その御殿の立派なご、梵宮も斯くやあらんと思はる、やうな善美盡した御殿、關白兼實公を初めごして名に負ふ月卿雲客が綺羅星のやうに並んで御座らせらる。熊谷はこの中を一遍も挨拶もせず

に麻の法衣に同じ袈裟かけ、念珠爪繰りながら末座へドツシリと座り込んだ。この武骨な態を御覽せられた法然様は氣が氣でない。

法然様の御説教は引續いて初まつた、生身の勢至菩薩がそのまゝ、浄土の莊嚴を御説きなさるゝので、極樂の有様は手に取るやうに聞

熊谷熱  
心に聞  
法す

へ、目の前に拜むやうである、熊谷は目たゞきもせず、睜り、法衣の袖を肩に絞り上げ、兩手は堅く膝の上に結び、眞劍に聞いて居つたが、少時するごヂリ／＼公卿様の前を膝でズツテ行き、トウ／＼法然様の御前近くまで進んで行つた。

法然様や公卿様達は吃驚なされた、先づ法然様は口を開かせられ「法力房、そのさまは何事で御座る。」

ご、御叱りあらせらるゝご、熊谷は兩眼からハラリ／＼と涙を流し「萬望、御師匠様お免し下されませ、さて／＼有難や、一念の證

りは、未來浄土でなければ開けまいと思ふて居りましたに、今天下に一の人の敬ひ奉る關白様ご、東育ちの無官の熊谷ご、同座して一味の御法義を聞かせて貰ふて、お慈悲喜ばせて頂くの

法然上人御一代記説教上



は佛法不思議でなうて何ごいたしましやう、諸上善人、俱會一處のお證りはもう間違ひは御座りませぬ、御師匠様、この熊谷の極樂參りの間違ひのないのはこれを證據にしても知れます、御師匠様これが泣かずに居られまじやうか。』

ご、大の男の熊谷が泣き崩れたれば、上人を初めごし居並び給ふ關白様、公卿衆までが互に感心せられ、貫ひ泣きせられたご云ふことぢや。

これも皆彌陀の本願の不思議、法然上人御化導の御徳のあらはれご申すものぢや、されば悪人凡夫の遠慮氣のない俱會一處の御本願なれば、貫ひ損ひのないやうに御慈悲頂かれたその上からは高大深重の御恩徳ぞご、朝な夕なに御苦勞の程を思ひ浮べ、念佛もろ共に

日送りせらるゝが何よりの肝要。

法然上人御一代記説教上終



法然上人 御一代記説教下

大富秀賢述

第二十六席

餓鬼を濟度せらる

大勢至菩薩の御化身たる法然上人が御年四十三歳にして他力本願念佛往生の根本を發見せられ、黒谷から吉水に下らせられて浄土門の門戸を張らせらるゝや否や、末世相應の教法、萬機普益の大誓願なれば、法を求むるの道俗は門前市をなし、足を運ぶ貴賤老若は稻麻竹葦にひこし。それもその筈で、遙か華の臺をすべらせられて和國に垂迹あらせられたる彌陀法王の化身たる善信聖人、觀音さまの



再誕たる玉日姫、揃ひも揃ふて權化の方々ばかりが、お前は弟子になれ、わしは師となるご極樂淨土の樂屋の中で御相談の上、無常を示す源平の烈しき世間を背景として、眞俗二諦の芝居を仕組み、肉食妻帯の御宗旨を開いて下されたのぢや。

この御化導が直々私共の耳の中へ這入るまでは並大低の御苦勞ぢやない、法然様は七十五歳の御時、腰に梓の弓を張り、額に四海の浪を寄せられて八重の汐路をはるくご四國まで御流罪、彌陀法王の化身たる親鸞聖人は三十五歳にして、四つの範意様に別れさせられ越路の雪を踏み分けて越後の國府に流し者、昨日の淵が今日の瀬となる變り易ひが浮世の習ひご云ひながら、權化の師弟が北ご南に別れさせられ、一遍の念佛も晴れて稱へさせらるゝごこのならぬ憂

き艱難を忍ばせられた、權化の方なればこそ忍び難きを忍び、堪へ難きに堪へさせられての御苦勞ぢや。この御苦勞があればこそ疊の上へ膝組んで聞き得る一つで往生治定、何の造作も苦勞も入らず、濡手に粟の果報者は末世に生れ後れた末子のわれくぢや。

さて法然上人の念佛弘通は日夜の御繁昌あらせられ鄙も都も御歸依申したが、此に京都四條の邊に尾張法橋ご云ふ繪師があつた、この繪師は幼少の時より畫を書くが天才で、師に就いてからメキくご上達し、當時は随分世間に名を賣つた人であつた、フトしたごごで吉水の御庵室へ詣で一席の法話を聽聞申したのが佛縁を結ぶ初めごなつて深く法然様に御歸依申し、時にはわざく御面にかゝりて懇ろの御法語を承つて居つた。然るに或時法然様は供養ご云ふにつ



いて御述へあらせられ仲々廣大な功德のあることを御説きあらせられたので、尾張法橋は是非法然様に御讀經を願はんものご、ワザワザ御請待申して七日間の法事をつごむることゝした。

それから法然様は二三人のお弟子を召し連れさせられて四條邊の尾張法橋の居宅へ御出あらせられ毎日午前中は御讀經、午後は法語あらせらるゝので、參詣の男女は家に満ちた。所が七日間の法事もいよく、明日一日で満願ご云ふ六日目の夜密かに法橋の女房が法然様の御許へ参り、

「さてこの間から日々の御法語を承りますれば、身に泌み渡りて有難う存じます、供養の廣大な功德のあることはよくよく合點が参りました、而し今日までの供養は云はゞ良人の身につ

く供養で、女房の私には何の功德もないやうに存じます、つきましては是非私も法事が勤めたう存じますで、宜しく御聞濟み下されませ。

法然様はこれを聞かせ給ひ、

「それは殊勝千萬なごご、シテ供養ご云ふは定めて先祖代々から法界の亡者の爲めなるべし法界衆生ご書けば一人ごして洩るゝ者なければそれにてよかるべし。」

これを聞いた女房は急に顔色がかはり、  
「いゑ、その法界衆生ごお書き下されては少し支障りがある  
ので御座ります、ご申すは餘の義でも御座りませぬが、先妻の  
子供が三人御座りまして二三年前に相果てましたが、この者は



過去世からの怨敵で御座りますか知らんが、生きて居る内は申すまでもなく、果てました後でも憎うてくくなりませぬ、外の者の爲めなら兎に角、法界衆生の中でもこの三人だけは除きたう存じます、萬望御慈悲で御座りますで、法界衆生の中からの三人は除くご御加へ下されこう存じます。』  
これを聞かれたお弟子方は  
『コレく内儀、生きて居る間こそ憎いご云ふごもあらうけれども死んだ後に何の憎くみがあるう、そのやうな意地を持たずに法界の衆生ご書いて頂いて御供養を願はれよ、それも御身の功德にこそ。』  
ごなだめらるゝご、女房はムツと怒り出し、

法橋の  
妻と三  
人の繼  
子

『若し法界衆生ご書いて頂いて三人の子が成佛するご猶更憎う御座ります、あれ等は何時くまでも苦めて置きたう御座んす、若し三人を除くご書いて頂くごが出来ぬばモウ御供養は止して頂きます。』  
これを聞かせられた法然様は、邪見な女房ご思召したが又々濟度する時機もあらうご思召し、法界之衆生、但除先妻之子三人ご御認めらせられて御供養なされた、女房は自分の望みが叶へられたので大層喜んで聽聞の席に列つて居た。  
所が、その翌日御満座の御化導の最中に俊に満天が曇り出して、疾風迅雷、實に天地も裂けんばかりぢや、この時黒雲の中からニヨツコリ三人の小兒があらはれ出て、件の女房の手を引いて、



『さてく、悪い阿母さんちや、わし等の生きて居る中はさんく、  
みじめな目にあはし、死んでからでもまだ憎みて、成佛の縁の  
ないやうにせらるゝ、こは現當二世の怨讐ちや、今日は閻魔様か  
ら御暇を頂いてお迎ひに参りました、サアこれから餓鬼道へお  
ちやれ。』

これを見た件の女房は吃驚仰天、氣も有頂天、急かに大きな聲張  
りあげて、

『ア—レ、助けて下され。』

帛を裂くやうな聲が俄かにしたので、參詣の諸人も吃驚仰天、法  
然様ごお弟子方は早速駆けつけさせられて御覽なさるゝ、骨と皮  
ごに痩せ衰へた小さい餓鬼が三人来て女房の手を引いて居る、その

中兄ごも覺しき餓鬼が法然様に向ひ、

『私等は尾張法橋が先妻の子供で御座ります、今の阿母さんにな  
つてから私には十四五日も食を呉れず、さうく干殺しにして  
阿父さんには病氣で死んだと詐はり、弟二人も同じ干殺し、そ  
れが爲め兄弟三人は餓鬼道の苦みを受けて居りますが、今度父  
法橋は彼尊を御招待申し、法事追善つごめられ、やれ嬉しやご  
浮ぶ時節を待つて居りましたに、今の阿母さんの願ひに由りて  
法界の衆生の中から先妻の子三人は取り除くごあるので、さて  
く情けなやこれで私等三人の兄弟は浮ぶ縁もゆかりも絶へ果  
てました、あまりの口惜しさに閻魔王に願ひ申しましてこの  
恨みを晴す爲めに母を餓鬼道へ伴れて参りこの苦患受けさせん



ごて迎ひに参つたので御座ります。

ご、三人の兄弟はさも恨めしそうに述べたので、中にも尾張法橋は吃驚仰天、

『さては三人の者は病死と思ひしに干殺しでありしよな、あはれぢや、可愛想ぢや、嘸残念であつたであらう。』  
女房は顔色青ざめて了ふて宛然死人のやうに口もをごろ／＼になりて、

『私が悪う御座りました、如何やうになりご計ふて下され。』  
ご、深く回心懺悔したので、法然様はあはれご思召し、それからわざわざ三人の子供の爲めに御經念佛あらせられた、それが了るご三人の餓鬼は只今成佛仕りますご念佛の聲もろごもにお告げしたごあ

る、この一事を聴聞しても念佛の功德は餓鬼道から直々に浄土に往生し、彌陀別意の御本願の不思議が知らるゝであらう。

第二十七席 蓮臺野の鬮を濟度せらる

引續いてお取次に及ぶ法然上人の御傳、前席では尾張法橋の内儀發心懺悔の義を御話しに及んだが、それに付てこれご同じやうな鬮を御濟度あらせられたごがあるで御取次に及ぶ。

時は文治五年の春、法然様五十七歳の御時ぢや、御弟子十四五人召し供し給ひ蓮臺野へ御出ましあらせられて仰せらるゝやうは、  
『源空兩三年前より時々不思議の夢を見るごごあり、その實否を正さんご思ふて今日は來りつるなり。』

法然上人御一代記説教下



ご、法然様はツカ〜ご高塚の上へ御登りなされた。これを見たお弟子方は、御師匠様が兩三年前から不思議の夢をみるご仰しやるは甚麼夢であらう、今何の爲めにこの高塚の上へ御登りなされるのであらうご、不審に思ふて居らるゝご、やがて法然様はその四邊にゴロ〜してある髑髏を指しなされて、一々お弟子に拾はしなされ、髑髏の塚をこしらへ給ふた。この塚が出来上るご法然様は阿彌陀經を御讀みなされてお弟子諸共塚の周圍を行道なされ、念佛數十遍稱へ給ひ、尙

皮にこそ男女のしなもあれ

骨にはかはる人形もなし

ご御詠みあらせらるゝご、凡そお弟子が掻き集められたる髑髏が百

四五十もあらう、その中から一つの大きな髑髏がコロリ〜ご轉がり出て、大きな目の穴から血の涙を流した。これを現在目撃したお弟子は怖しいやら不思議やらで、

「コハ抑も如何なる方の首にて候や。」

ごお伺ひ申した、法然様はその首を焼かしめ給ひ名號を書いて仰つしやるやうには、

「古、源空が叡山にて修學の時に三位注記祐尊ご申す同學の僧ありたり、或日所用ありて京都へ下りしが、そのまゝ何所ごもなく失せて了ふて山へは歸らざりき、一族の人も所々方々ご探し求むれごも更に分らず、そのまゝごなり居りしが、その翌年風の便りによれば祐尊は人に殺害せられて亡き骸は蓮臺野に捨



てられたりご、されば一族の人はそれとも知らず祐尊の亡骸は  
空しく犬や鳥に噉はれて一度も香煙も立てられざりしが、去る  
夜源空の夢に件の祐尊あらはれ来て、われ過去世の業報に由り  
て都にて殺害せられ、その骸は蓮臺野に捨てられたり、何卒往  
昔同學の好意にて弔ひ給はれ、天台の習學はあれども未だ成佛  
せずして迷ふなりご告げければ、源空は必ず弔ふべし、心安く  
思召せご答へたれば祐尊は喜びて涙を流したり、今日はその夢  
にまかせて來つるに、さては正夢にてあの血の涙を流すは必ず  
祐尊なるべし。』

ご、仰せられたれば、お弟子の方は今更念佛の功力の廣大なのに感  
じ給ふた、その夜法然様の御夢に、件の祐尊があらはれ、御弔ひ下

されて今や天上界へ生れ出ますご、御禮に參られたごある、これも  
廣大な念佛の功德のあらはれでありますぞや。』

その頃京都に桓舜僧都ご云ふすさまじい學者が御座つた、けれご  
も不幸なごには至つて貧乏人、今日の言で申せば赤貧洗ふが如し  
ごでも云ひたい位で、五體を包むにも紙の着物を着られ、随つてお  
腹の中も常に空き勝ちご云ふ鹽梅ぢや、甚麼學者様でもそれでは修  
行も思やふうに出來ぬに間違はない。そこで桓舜僧都は迎もこれ  
は未來遁るゝ仕事も出來ぬ、何ごかして福にありつきたいものぢや  
ご思はれて、それから山王權現へ參りて百日の間歩みを運ばれ、何  
卒桓舜に福德を與へて下だされそれも餘分にごは申しませぬ、只飢  
寒を免れて學問さへ出來ればよろしう御座ります、何卒それだけの



福德を與へて下されど御願ひなされた。けれど百日の満願が来たけれど何の御告げもない、これでは迎も山王様は桓舜を見捨て、了ふて福德を下されぬのであらうと思召し、それから稻荷大明神へ七日の間参籠して祈願を籠めさせられたのぢや。

稻荷さんはこの祈願を最も思召して七日満ずる曉に千石ご書いた札を手に持たさせられ、その札を僧都の額へベタリご張らさせられた。千石頂いてみれば萬更悪くもない、四斗俵にしてもザツご二千五百俵ある、奥州の本間などは何萬俵ご云ふ年貢米が入るがそりや庄内三郡をわが物にした日本有数の財産家のはなしぢや、桓舜僧都は昨日まで、イヤ今日の今まで三度の御飯が十分に喫べられぬ、寒暑を凌ぐ衣さへ十分になくて紙子を着て御座つた貧僧ぢや、それ

稻荷明  
神千石  
を授け  
らる

に千石ご云へば恁麼成金はない、船成金も株成金も及ばぬ結構なごこ、喜んで御座るご、この時末社の神らしいが出て来て只今お客様が参られましたご告げた、ハハア、神様には神様相應の交際がありて、來客らしい甚麼來客か見て居ろうと思ふて、その神様は大勢の供を連れて立派な御所車に乗つて若い女儀が見へた、稻荷大明神は白髪頭でお迎ひ召さる、何故にこの夜中に來臨ご尋ねらるご、女儀の神様は、檜の扇子を廣げ乍ら、さればです、桓舜ご云ふ沙門が御許へは参りませなんだでしやうか、成程その沙門なら七日前から参籠いたしまして……福を求めに参つたで御座る、私は左様であらうご存じて参殿しました、別儀でも御座りませぬが、その沙門は當殿へ参りますまで私へも百日の参籠をいたし福德を求めました、

法然上人御一代記説教下



一八  
さり乍ら私は一向に相手にしませなで御座る、何は兎も角若し福  
をお授けになつたのなれば早く取返して下され、これを聞かれた稻  
荷大明神は白い鬚を撫でながら、そりや山王權現の異な仰せ、貴  
殿が福を授けられぬと申して、拙者にまで與へた福を返せとは勝手  
な言ひ分、兎角われ／＼は信用が第一で御座る、流行の神と申せば  
これもこれも信用のある方ばかりぢや、一旦與へたものを取り戻せ  
ば全く私の信用は地に墮ちて了ふで御座る、シテ取り返すべき理由  
でも御座るか、これを聞かれた山王權現様は、小さは口元を開いて  
ニツト笑ませられ、理由がなくて何と致しましやう、その理は後程  
申上げん、早くその福德を取返して給はれと仰せられた。

稻荷様も仕方がないから、最前桓舜僧都の額に張られた千石と云

ふ札をツト手を伸してベリ／＼と剥いて了はれた。折角成金になつ  
たと思ふて喜んで居つた桓舜僧都は吃驚仰天、さてはあの女儀は山  
王權現であるか、自分が百日の祈願籠めて福分を授けて下されと祈  
つたのに何の返事もせられぬのみか、稻荷様が折角授けて下された  
福分も邪魔にして除かつしやることは、さて／＼神様でも女儀は胸の  
狭い淺間布いものよと恨んで御座ると、この時山王權現は容を改め  
ての仰せ、

「桓舜はこの度こそは生死の迷ひを免るべき身分で御座る、指屈  
りてみますれば最早餘命も幾何もありませぬ、然るに今度千石  
の福分を得ますればそれが爲めに若しや名利に執着し、榮華に  
耽りて菩提の修行を怠りて又々惡道へ沈んでは取返しのならぬ



二〇  
ここ、たごひこの世は食ふや食はずに過しましても云はゞ夢幻の境で御座る、未來こそは一大事、たごひこの世は苦しむことも未來は助からさせて遣りたう御座る、それが爲め私はワザも福分を授けぬので御座ります。』

これを聞いて居つた桓舜はハツと夢の中から覺めて泪に咽んでさては山王權現様は私の未來を憐れみましくして斯くまでに御心配下されましたのか、それに今までお恨み申したことの勿體なや、斯く承る上からはたごひこれより後は飢餓の爲めに死にましても恨みごは存じませぬ、何卒未來は佛果に至らせて下されませご、山王權現様の御慈悲が身に泌み渡りそれから、直ちに吉水の法然様の御許に參られ、淨土の法門を聽聞して無二の念佛行者ごなられたごある

桓舜  
郡吉水  
に上人  
を訪ぬ

御一同、この長々の物譚を聽聞して何ご思はる、如何程先の百より今五十ご云ふたごて、少時の娑婆ぐらしの爲めに無量永劫の後生ごは秤にかけられまいであらう、この世はホンの夢の間ぢや、一世の勤苦は須叟の間、永の後生を取り損じてはならぬ、然るに世間には少しのお金が出来るごあるにまかせ榮華振り、この世の五欲に心を染ませ未來ごも後生ごも願はぬ人は、あゝ山王權現様の御毗からは如何様に御覽なさるゝであらう、貧乏で一向如來様の御手回しがないごお恨み申すぢや御座らぬぞへ、それに付ては後生を願ふ心が起るでもあらうかご、思召す方便ぢやからこの世五十年は善いにつけ悪いにつけ過去世の宿因にまかせ、やがては開く淨土の華を樂み日送りせらるゝが肝要ぢや。



第二十八席

耳四郎の懺悔

大勢至菩薩の權化たる法然様の御徳は一世に轟く惡黨の張本人にまで及んだ。その頃天野四郎ご云へばまるで惡黨の代名詞にまで使はれ、只今で申す石川五右衛門も同じやうに恐しがられた惡黨ぢや生れは攝津幣島ぢやが、この天野四郎は何ごして嗅ぎ出すやら金を儲けた人や、財を持つて居る人の噂は何時の間にもやら知り出して來るので世間では綽名して耳四郎くご稱して居つた位ぢや、耳の聰いご云ふごこの異名ぢや。この男は生れつきが梟惡で、氣の毒ぢやごも、可愛想ごも思ふ心は毛頭ない、殘忍酷薄、まるで虎や狼ご同じやうな氣持の人間らしい、まだ年の若い時分から盜賊の張本人ご

耳の聰  
ひ惡黨

なり、夜討しては金を奪ひ、人を殺しては貨を掠め、一旦取ふご思ふたら甚麼故障があつても一度は屹ご取り奪ふご云ふ聞くさへも身慄いするやうな人間ぢや。

或年、大阪地方の仕事を段々仕遂げて來て、京都へ入り込んだ、その頃の京都は云はゞ日本一の帝都、只今の東京ご大阪ごを合した位の權威のある土地柄ぢや、随つて有徳の家は洛の内外に滿ち渡りてあるので、耳四郎はニコくして喜びこの分なら須叟の間に大仕事が出来ると日の暮れるのを待つてよい仕事しやうご思ひ姉小路白河の大きな家の椽の下へ身を隠して居たのぢや。

何時の間にもやら日も暮れて、耳四郎は椽の下にありながらウトウトご目睡むよご思ふご、家の中では急に大勢の人々が念佛申す、

法然上人御一代記説教下



その念佛の聲が終るに何やら語り出す様子である、耳四郎は初めの中は仮寝の便り位に思ふて聞いて居たが、追々その語る文句がハキ／＼聞へて来る、聞くこともなしに耳を欬て、居るこ、

「彌陀の本願は悪人正機ぢや、されば十惡五逆、生盲闍提、破戒無戒の悪人は只念佛の一行に縋るより外はない、第十八願の上では十方衆生と誓はせられたるも、彌陀のお慈悲は智者や聖者や、善人や學者ぢやない、三界に取りつく島も便りもなく、三世の諸佛からは永不成佛必墮無間、恒沙の薩陲からは無有出離之縁と見限り果てられ、臨終捨命の夕には一生の悪業の爲めに牛頭馬頭の惡鬼羅刹に迎へ取られ、無間墮獄の大罪人が一聲稱念稱南無阿彌陀佛と、名號のいはれが聞き開かれた一念に早や

お助けぢや、今までの火車來現はその場で黄金の蓮臺ごかはり彌陀の淨土へ往生遂ぐるなり……。」

肱枕して居た耳四郎は何時の間にもやら起き直り、兩手を組んで一心に耳を澄して聞き始めた、怎ぢや、御一同これが宿善到來で御座るのう。信順を因ごなし、疑謗を縁ごなすごは全くこれぢや、平生の御教へに近寄れ、佛法へは近寄らねばならぬ、近寄らねば濟度するごは出來ぬと仰つしやる、初めから信ずるごが出來ずば、たごひ謗つてなりごも近寄れと御化導なさるごのは此ぢや。盜賊に入る時間が早いので、その暇潰しに隠れ込んだのが抑の因縁ぢや、この時佛の引接の光りが惡黨の胸の中へキラリと閃めいて下されたのぢや。



二六  
耳四郎はつらく今までの爲して来た悪行を考へ出した、人を殺し、財を掠めしことはその數を知らず、鬼よりも大蛇よりも恐しい仕事、あゝ今にもこの命が終つたら、無間の火焔は免れぬ、あゝ怖しやゝ、然るに今承れば彌陀の本願はかゝる悪人にも助けまします御本願ごやら、これが聞かずに居られようか、全く彌陀の本願はワザ／＼この耳四郎の爲めに御建立下されたのであらう、あゝ有難や南無阿彌陀佛／＼。

耳四郎は懺悔の汗で五體はびつしよりぢや、そして心の中は改悔の涙が満ちてさながら酔ふたやうぢや、イヤこれから飛び出して今までの悪行を懺悔して佛の教へを聞いて貰ふか、イヤ／＼大勢の中へ飛び出したら、罪なき人に迷惑をかけん、まづ／＼明日まで待つ

がよからうご、その夜は一晚その椽の下で小聲で念佛し通したのぢや、一旦御慈悲が滲み徹つた耳四郎は早う尊い教へが聞きたうて夜の明けるのがもごかしくてならん、變れば變つたもので御座るもんぢやなあ。

東の空もほの／＼と明けて来て怎やら人々も起きられた容子なので、耳四郎はノソリ／＼と椽の下から這ひ出して来て、庭先に蹲んだ、これを見られた法然様のお弟子方は、まだ夜の明け方の薄暗いのに異様の姿の人物が現れ出たので吃驚なされ、貴様は何者ぢやと大聲で問はれたので、耳四郎は、ハイ私は天野四郎ご申しまして盜賊の張本人で御座ります、お弟子方は二度吃驚、や、や、さては貴様は世をあらす耳四郎か、但し此は御房にて貴様の目にかけるやう



な實のあるものは一物もなし、疾く去れ、下れ、これを聞いた耳四郎はさてはこれなるは、尋常の家で御座らいで御房で御座りましたか、シテ何様の御房で御座ります、これは法然上人のお弟子法蓮房信空上人の御房ぞ、されば昨霄の尊き御法語は信空上人にましますか、イヤ、あれはわが師法然上人にましますぞ。

これを承つた耳四郎はパタリと大地に平伏しになり懺悔の涙はハラリ／＼と珠をなして落ちお庭先の砂を潤した。うして日頃の悪行を述べ、後生の助かるべき道を教へて下されとお願いした。これを聞かれたお弟子方も初めて胸撫で下し、それから法然様へ申上らるゝと、やがて御面會あらせられ親しく御教誡あらせられたので、耳四郎はいよく今までの悪行を廻心懺悔して無二の念佛行者となつた。

然るに丹波國住人篠村新左衛門範長と云ふ者があつて、先年自分の親族の者がこの耳四郎の爲めに殺害せられ、その上持ち合せの數多の金銀も悉く奪ひ取られたのでその無念遣る方なく、好き時機もあつたならこの讐を打ち取つてやらうと只管その機會ばかりを考へて居つたのぢや。

この時世間の噂には耳四郎は近頃京都の某所に居ると云ふの聞いて範長は一人の朋友を使者として酒宴に托せて耳四郎を招いたのぢや、耳四郎は其麼昔の悪行は忘れて了ふて招かるゝまゝに範長の宅へ出蒐けた。

スルと胸に一物ある範長は何でも耳四郎を十分酒に酔して、その



隙を窺ふて斬り殺し昔の讐を報ひんものご、一生懸命に酒を侷めたのぢや。

耳四郎は侷めらるゝまゝに盃を重ねて、大分に酩酊し、果てはその場で打ち倒れ、前後正體もなく高軒で寝入つたのぢや。範長は謀計全く當つたご小躍りして喜び、それから朋友の者を助太刀に頼み、いよく積年の恨みを晴しくれんご、刀の目釘を引きしめて、水も垂るやうなのを抜き放ち、抜き足、差し足、高軒で寝て居る耳四郎の側へ寄り、耳を寄せて寢息を窺ひイザ御座んなれご、三尺の秋水を振り上げて斬り下げんごすれば、寝て居るのは耳四郎でなうて金色阿彌陀様ぢや。

範長は吃驚して、振り上げた刀を持つたまゝドヂくご三尺程後

ろへ立ち退いて、よくく見ればやつぱり耳四郎で、寢息の口から南無阿彌陀佛くご唱名して居るのである。範長はさては見損じたか、全く耳四郎に違ひなし、今度こそは一刀兩断にせんご、太刀振り上げて斬らんごすれば、不思議や寝て居るのは耳四郎ぢやなうて金色の阿彌陀様ぢや。助け太刀に來た朋友は怖しがりて逃げて了ひ範長もつくく考へてみるご、實に不思議でならぬ、手に持つた太刀捨て、高軒で寝て居る耳四郎を揺り起した。起された耳四郎は何事ぞご目を覺しければ、範長はその前に兩手をついて、今までの出來ごこの一伍一什を述べた。これを聞いた耳四郎は驚き、さては貴殿はその方の親族の人なりしよな、その所爲は全くこの耳四郎の仕事に相違御座りませぬ、イザ今こそは尋常に讐を打たれて果て申



さん、聊かも手向ひ申さねば如何やうなりとも貴殿の御意にまかせて切り殺し下されご、左も神妙に首を差し出した。

範長はその語を遮りて、イヤ／＼殺そうごて申すにあらず、念佛の功德の廣大なごことが知れ申したれば、われもこれをよき佛縁ご存じ共に御法義に入らんごてお告げ申したるなりご、その場で範長も髻を切り下し直ぐに信空上人の御許に参りその手引によりて吉水の禪室に法然様を訪ひ奉りお弟子ごなりて立派な念佛行者ごなつたごある、世に教阿彌陀佛ご申すはこの耳四郎のごごちや。怎ぢや御一同、何れを頂かせて貰ふても實に御徳の勝れさせられた法然様ぢやこの御化導を朝夕耳近う聞かせて頂くお互ひは又なき仕合せ者ぢやご存ぜられたら、御恩の稱名懈怠なく相續せらるゝが肝要なり。

第二十九席

平重衡上人の誨を乞ふ

追々座を重ねて聴聞に及ぶ法然上人の御傳記、御本地大勢至菩薩が時機相應の要法たる念佛の入門を御勧めなさるゝので、吉水の御門前は又なき御繁昌、上は後白河法皇、高倉院を始めごし、關白月輪禪閣、權大納言公繼卿の方々、又武家にありては小松内大臣重盛卿を始めごし、通盛、忠度、維盛、南都大佛殿を焼き拂ふたる重衡その他源家の側では既にお取次に及んだ熊谷直實を初めごして津の戸三郎、宇都宮三郎、甘糟太郎の方々がわれも／＼ご御歸依なされた。今度はその中で南都、大佛殿を焼き拂はれたる平重衡がお弟子ごなられた發心談をお話に及ぶ考へぢや。



この重衡は清盛の子で大佛殿ばかりぢやない、父清盛の命を受け  
て三井寺、興福寺なども焼き拂ふた人ぢや。これはなぜ云ふに三  
井寺や、東大寺興福寺の僧徒が源頼政に加勢したか爲めで、その憤  
りを晴らさうとて焼いたのぢやが、中でも大佛殿を焼き拂ふた時な  
ごは誠にあはれなことを行ふたものぢや。丁度奈良では力なき子供  
や年寄はソレ戦が起つた云ふので逃げ場がなく、皆一様に大佛殿  
へ避難したのぢや。如何程平家が無茶苦茶な亂暴な振舞してもヨモ  
ヤこの大佛殿ばかりは焼くやうなここはあるまいと思ふて逃げ込  
だのぢや。

けれごその頼みの綱は徒勞となりてやがて四方から打ちかけたる  
火焰は炎々として燃へ上り遂に逃げ込んで居た千七八百人の年寄や  
子供や尼衆などはそのまゝ、焼き殺されて了ふた、まるでこの世から  
の焦熱地獄、叫喚大叫喚の聲は奈良の街中に満ちたごある。それの  
みならず聖武天皇の鑄給ひし大佛様は首が落ちて了ひ、宏壯たる東  
大寺も焼野原となつて、見るかげもないあはれなものになつたのぢ  
や。

斯やうな亂逆な振舞をした重衡は因果の報ひか、その後三年して  
から一の谷の戦ひに出た、この時生田森に手兵三十騎を打ち具して  
守つて居つたが、九郎判官義経が鷲尾義春を先導として一の谷の後  
ろの鴨越から眞逆に攻め立てたので、平氏の軍容は全く亂れて我一  
にご須磨へ逃げ失せた、この時義経の弟の範頼は生田森を攻めかけ  
たので重衡の手兵三十餘騎は揃ひも揃ふて弱武者ばかりであつたご



見へ、源氏の白旗見るなり腰を抜かして逃げ失せた。

重衡は詮方なく一人の手兵もなし只一騎須磨の浅瀬にマゴくして居たのを遂に源氏の兵に捕虜にせられた。この一の谷の戦ひには敦盛でも通盛でも悉く討死したのにこの重衡ばかりはよう討死もせず、捕虜となつて生恥を瀑すのはこれ大佛殿を焼き拂ふた佛罰が報ふて來たのぢや。

昨日までは平家の御曹子で美々しい牛車で都大路を練り歩き一世の榮華を一身に集めて居つた重衡もあはれ今日は穢い板張の車に乗せられて囚人の姿、昨日までは五十人七十人の護衛の兵が、今日は罪人追ふ番兵ぢや、重衡は京へ入つてから故中御門藤原中納言の邸へ一時幽閉せられたが、まだ命が惜しいので、このまゝ出家したい

ご乞ふたけれどもお許しがないので、さらば法然上人に面謁申し、後生の大事の御化導に預りたいこの願ひであつた、こればかりは院御所もお許しあらせられたので、重衡は友時と云ふ臣下を吉水の御庵室へつかはし法然様の御入來を乞ふた。

法然様は今に打首に會ふ重衡の心中あはれと思召し、お弟子召し連れさせられて御入來ならせられた。この時重衡は幾度も法然様に拜謝し、

「重衡の願望お聞届け下され、わざわざ御出下されし段有難う存じます、御師匠様も御存じの通り、私は昨午都を出ましてから聞くもいまはしい戦ばかりで數多の人を刺し殺し、手疵を負はせ、中にも大佛殿炎上のことは申すも怖しい罪業で御座ります



されば生田森で討死も仕らず、斯く都大路まで生恥を溲すは畢竟この悪報に存じます、今生でさへ斯くの通り、未來は怎のやうな苦患を受けるここやらこそそれが心配でなりません、あはれ願くは御師匠様、かゝる悪人でも後生助かる法があらば教へて下され。」

重衡も今は懺悔の涙に咽び、珠の露を膝に落してお願ひ申した。これをお聞きあらせられたる法然様もあはれよと思召し、同じく涙に咽ばせられ、

「御一門の榮耀は宛然天上界の如く御繁昌なりしに今このあはれの身ごならるゝも盛者必衰のここはりに侍れば少しも怨じ給ふことなかれ。大佛殿を焼くは愚かなこと、父を殺し母を殺し、

上人親しく重衡に誨へ給ふ

佛身より血を流す悪人も一度廻心懺悔して彌陀に縋れば、助けましますこと決定必定なり、源空がすゝむる彌陀の本願は悪人正機として引接しましませば、罪重きに心を痛めず、障り多きに二の足ふまず、ムツゴすがりて一心に念佛せば次生往生に間違なし、ゆめ疑ひ給ふことなかれ。」

重衡の臨終は實に逼つてある、活殺の權は源家に握られて居るので、イザ云へば今にも知れぬ生命ぢや、されば重衡が求法の念は實に頭髮に火のついてあるやうに痛切である、法然様がお示しなされた一席の法語で、全く重衡は信心開發して此に三忍を獲た、もう重衡は昨日までの重衡でない、如來に攝取せられ、光明中に活躍する身分となつた、重衡は大に喜んで、かねて宋朝から父清盛へ贈ら

法然上人御一代記説教下



れたる「松蔭」の硯一面を法然様へ奉つて法施ごした。 四〇

その後重衡は鎌倉へ送られたが、その道中遠州池田の宿に泊つた時、驛長の熊野の娘が重衡の身に同情を寄せて、

東路のはにふの小屋のいふせきに

故郷いかにこひしかるらん

と詠じて重衡に贈るご、重衡は

故郷は戀しくもなし旅の空

都もつひのすみかならねば

今に殺さるゝ身はもう都も住むべき地であらねば戀しくもなし、  
やがて死んで行くご思へば五十年の浮世が何の戀しいごがあらう  
この世は全く盟から盟に入る五十年の旅の空ちや、埋めば土ごなり

焼けば灰ごなる果敢ない浮世である、戀しく懐かしく思はるゝは今  
参らせて頂く彌陀のお浄土で御座るの意はへちや。

然るに重衡が鎌倉へ入つたご云ふ噂を聞いた奈良の僧兵は頻りに  
鎌倉へ重衡の一身を奈良の所置に任かして下されご願ひ込んだ、そ  
れは重衡が大佛殿を焼き拂ふた鬱憤を晴す爲めちや。鎌倉ではこの  
申込に應じ再び重衡を大和へ返した。

奈良の僧兵は、この大佛殿を焼いた佛敵法敵の重衡を何ごして殺  
さう、堀首にしやうか、鋸引にしやうかご寄々相談したが遂に木津  
川の邊で首切るごに定められた。

いよく何日は重衡の首落ちご云ふので木津川の河原へは見物人  
が雲霞のやうに集まつて來た、やがて打首の時刻も近寄りたご云ふ



時かねて吉水の法然上人へ使者ごして参つた臣の知時が汗だらく  
流し鞭音高く来て、重衡の傍近く寄り、

「御洪恩の萬分一にも報ひ奉らん爲め私こそ御最後を見んこて参  
上仕りました。」

重衡はその志を嘉し、やがて近村から阿彌陀如來一軀借り來り、重  
衡はこれを河原の沙の上に安置し申し、しみぐゝごお暇乞の念佛を  
稱へ、遂に首を斬られた、年は二十九であつたご云ふ。

これをお聞きあらせられた法然様はあはれのここよご仰せられて  
懇ろに念佛讀經あらせられたご云ふごごちや。

第三十席 武家の發心

座毎に聽聞に及ぶ法然上人の御傳記、前席に於ては平重衡の發心  
談をお取次に及んだが當席は、平維盛の發心談を聽聞に及ばん。こ  
の維盛ご申すは重盛公の長子で、清盛の孫に當り、云はゞ平家の嫡  
流ぢや、その姿があまり美しいので、當時世間から櫻梅少將ご呼ば  
れた位であつた、また年若いのに三位中將の榮官に任せられ、源氏  
の兵を起すや總追捕使に命ぜられたが、一の谷が落城してから屋島  
に逃げた。

時は元暦元年三月十五日、維盛は潜かに屋島の館を遁れ出で、阿  
波の國から鳴門の海を漕ぎ渡り、紀州國由良の港へ着かれた。都に  
はいごしい妻や子供が残つて居るので、遠が恩愛の、このまゝ都路  
へご思ふたが、重衡が生捕にせられて空しく恥を深し居るごき、恩



愛のもつれを思ひ切りて高野山へ登らうとせられた。

けれど粉川寺は、殊に観音の靈驗あらたかき、かねては父重盛郷も、この御堂へ参詣し給ひ、その序に打ち札を書き給ふた由を聞き及べば、今日ありて明日なき身の、浮生の思ひ出にその父上の御手跡をも拜せんものと維盛は先づ粉川寺へ参詣せられたのちや。

先づ維盛は本堂へ参詣して観音様の御前に座り祈願をこめて居らるゝと、その時一人の出家がツカ／＼と維盛の側へ来て、御身は何所より來られしぞと尋ぬるので、維盛は恟／＼とし、若し源氏の回し者ではあるまいか、平族の中でも、われは嫡流なれば源氏は草を分けとも探ねるに違ひなし、若しやこの沙門がその探訪の者にやあらんこ、心配しつゝ、只何氣ない體にて、都の方より参りたる者で御座る

維盛粉川寺へ詣す

と答へらるゝと、件の出家は左様で御座りますれば、この寺へ都から法然上人が御下向の由を御承知にて御参りなされしかと云ふので、維盛は一向に無案内ぢや故に、その法然上人は何の爲めに御下向で御座りますと問へば、さればで御座る、かねて上人には都にて念佛の法門を御勧めあらせらるゝこの噂を承り、當寺にてもその念佛の御法語を拜聞せんとしてわざ／＼御請待申し來りしなり、かゝる折に御参詣になりつるはよくの／＼宿縁のましますことなれば、明日の御法語には是非聽聞し給へと勧めたので、維盛は大に喜び、舟案内して來た與三兵衛を顧みて、よく／＼の観音様の御引き合せご實はわざ／＼都へ上りて法然上人に面謁申し、後生菩提の道しるべを願はんものをご思ひしも、世を憚る道狭き身なれば心ならずも果

法然上人御一代記説下



てざりしに、今日ゆくりなくもこの御寺にて法然上人の御法語に遇ひ奉ることは、これぞ大士の利生淺からざる御利益こそ喜ばれた。その晩、維盛は潜かに法然上人の御庵室へ参り、屋島の館を遁れ出て高野にご志す序にこの寺へ参詣いたせしに上人に見参仕るは不思議の因縁にこそ、何卒出離の一大事を説き示し給へ願はれた。これを聞かせられた法然様は、過ぐる日は元三位中將重衡に請せられて念佛の本願を説き、今亦この粉川寺で三位中將維盛に會するはよくくの過去世の因縁なりと思召し、あはれに思召す御涙は上人の兩眼を曇らせた、やがて上人は、

『オ、姿こそ夔れ給ひしが、まがうかたなき、小松内府の御遺身、よくも後生の大事を氣にかけて來給ひつるぞ。』

法然様は法衣の袖から手を出し給ふて、維盛に近う寄れご御指圖あらせられて、

『都を立ち出給ふてから日に夜に聞くもいまはしき戰陣、さぞかし疲れ給ひしならん、噂にて聞けば、何某が打死、誰々が生捕りなご承れば、迎も今生にては見参し難きものと思ひつるに今日計らずも面調を得たるは喜びごごなり。』

この時維盛は悲喜の涙を押へて、

『家門の榮華すでにきはまりて、先帝を始め参らせ、一族悉く西海に落ち下りし上は憂きごご多かりし中に一の谷にては平族の重立つ者は亡びたり、虜ごなつたり、げにはかなき事のみ候、されば某ごごも今日ありて明日をも知らぬ命なれば出離生



死の要道を示し下され。」

その晩は一晚御物語あらせられたが、さて曉方になつてから、維盛は肌身から一つの巻物を取り出し、法然様に向ふて、  
『これは某が幼少の時より身を放さず日毎に讀みたりし御經にこそ、若し維盛世を去りしと聞き召さば一遍の御廻向を頼み上げます。』

さて、赤地錦の袋の中から法華經を取り出して法然様へ渡された。法然様は念佛の法門をくれぐれ御教化あらせられたので、維盛は大層喜び、よき善知識に遇ふて出離の大事に安心せしことの嬉しさよと泣く泣く御庵室を辭し、そのまゝ何所ともなく立ち去つた云ふことぢや。

又、津の戸三郎爲守は源頼朝に隨ふて大佛殿の供養會に參詣したが、御供養のころ終つてから吉水の禪房へ法然様を訪れ申し、私は年十八歳にして石橋山の合戦に隨ひ、それより處々方々にて人を殺し、殺生いたせしことその數を知らず、斯かる機でも彌陀の本願は救いませますか。今までの罪業を懺悔し、法然様からは吳々念佛の一行の御いはれを聽聞し、遂に無二の念佛行者となり武藏國へ歸り行狀堅固に日ぐらしせられたと云ふことぢや。

又、甘糟太郎忠綱は源平の戦ひには關係はないが、武家のお弟子として名高い人である、この甘糟太郎は世に云ふ猪俣黨の剛勇であつたが、叡山々門の堂衆が衆徒と仲悪く、遂に日吉八王子の社壇を城廓としてその勢ひ仲々強かつた、迎も衆徒の力では抑へ難いの



五〇  
で清盛は院宣を奉じて湯淺宗重を總大將として三千騎を率いて東阪本から攻めさせた。

この時甘糟太郎は一方の大將となりて出陣に及んだが、三條河原を出蒐くる時、今戰場に向へば生きて還ることは期すべからず、吉水には法然上人にて世にも隠れなき高僧ましますと聞く、今出離の一大事を聞き明さずば無量永劫の後悔なりとそれから馬を進めて吉水に法然様を訪れ申し、私は武勇の家を生れ多年弓矢の道にたづさはり侍ります、今日も院宣によりて堂衆を攻めんとために八王子の社壇に参りますか、進んで戦はんごすれば生死の程は計り難く、命が惜しいとて退いて居りますれば不覺の名を取り子々孫々までの家名の汚れごなります、何ごしたらば宜しう御座ります、弓矢をも捨て

上人親  
しく念  
佛の一  
行を説  
き給ふ

ず、戦ひもしながら未來は佛になる道があらば教へて下されと、申上げた。

この時法然様は、彌陀の本願は十方衆生ごなれば、機の善惡、行の多少、罪の淺深を當ごし給ふにあらず、只一向に念佛して往生の大益は彌陀一佛に打ち任せば、罪あり乍ら障あり乍ら次生の往生疑ひなけん、されは平生の時往生定まりぬれば死の縁無量にして、弓矢にて死するも、刃にて死するも死の善惡を論ぜず浄土に引接し給ふなりと、懇ろに御諭しあらせられたので甘糟太郎は今まで、迷雲さらりと晴れ、喜び勇み法然様から下された袈裟を鎧の下に着し吉水を辭した。それから念佛もろごも八王子の城に向ひ一命すて、戦つたが遂には數多の疵を蒙り矢盡き太刀折れ、最早これまでと覺悟



して念佛もろごも討死した。

この時吉水の法然様は、北嶺から紫雲の棚引くここをお弟子から聞召し、あはれ甘糟太郎が往生しつるなりと仰せられたと云ふことである。

往昔の聖人は朝に道を聞いて夕に死すごも可なりと言はれたが、念佛行者がその通りぢや、朝聞いて夕に死んでも往生ぢや、今聞いて今定まるが彌陀の本願の極樂参りぢや。斯かる尊い御法を餘所事に聞いて居つては勿體ないぞや、名聞人並の心中では残り多い、只表面ばかりの念佛者では残念ぢや、甘糟太郎が今聞いて今安心したのは餘所事にして居らぬからぢや、わが後生の大事と引受けてみれば今聞いて今安心の出来る易行の本願なれば、今日までの大様懈怠

の心中を相改め、彌陀一佛と纏られてこそ参詣の足手を運ばるゝ所詮と申すものぢや。

第三十一席 熊谷の東下り

相續いて御取次に及ぶ法然上人御一代御傳記、さて坂東隨一の剛の者ご名乗りをあげた熊谷も一ご度法然様のお弟子ごなつてからは無二の念佛行者ごなり、日々法然様の御教化にあづかり法味に浴して居つたが、故郷の方にはまだ老ひたる母も妻子もあるので、遠が故郷の風月物なつかしく、且つは寄る年浪の母も如何しつらんと思ひ、一日法然様に向ひ、

「私事、重々の御化導にあづかりまして今は往生浄土も疑ひなく

法然上人御一代記説教下



晴れ渡りました、つきましては、國許には一人の老母が居残つて居りましたその後は如何にらし給ふぞ、若しやこのまゝ永き別れにでもなり申さば、後生の用意もなければ導く人にてはなし、永き世苦みを受けさせんも本意なきことなれば、一先私も本國へ立歸り老母を初め有縁の人々へも念佛を勧めたう存じますれば暫くお暇を下さるやう願はしう存じます。』これを聞召した法然様は、

『如何にも父母に孝養をなすは佛の道なり、人倫なり、猶老母に念佛をすゝめ未來永劫の樂味を與へんごするはこれ實に廣大の報恩なり、十方諸佛に仕ふるも報恩の思ひなくば佛意に叶はじまして他力易行の淨土門に於ては猶更なり、急ぎ下向せらるべ

し、但し今は昔の熊谷次郎にあらずして念佛修行の法力房蓮生なれば必ず一徹の短氣に逸るべからず、ゆめ氣をつけ給ふべし。』  
ご、懇ろにお諭しなされて暇を下された。

頃は建久六年八月ちや、秋風そよ／＼と吹く旅には又ごない好い氣節である、熊谷は住み慣れた華洛を後にして念佛の聲勇ましく白川越から大津へ出た、素より吉水の門下では素直な、堅固な念佛者だけありて、平生から行往座臥不背西方の戒めを深く信じ、夢にも西の方へは足を向けず、西に云へば恐しい程大切に思ふて居た。

熊谷は大津から草津まで馬に乗った、馬上跨った熊谷はつくづく考へるご、行往座臥不背西方、御師匠様は何時も西方は極樂のある所、彌陀法皇のまします所ぞご仰せられた、すれば念佛の行者たる



者がウカ／＼西方へ尻向けてはならぬ、あゝ勿體なや／＼、御慈悲の如來様に濟まぬここで御座ります、南無阿彌陀佛／＼、クルリと馬上逆轉し所謂逆馬になつたのぢや。

京都の新京極や、淺草の山奥で行る奇術や曲馬ならいざ知らず、尋常の乗馬に恁麼乗り方は恐くあるまい、道行き交ふ人々はあれよ／＼と指さして笑はぬ者は一人もない。斯くとも知らぬ馬子は手綱を曳いて先へ進んで行つたが、馬の足並が何時に似合はぬ悪い、これは昨日あまり馬を酷使ひした加減であらうか、それが爲め足でも痛めたのであらうと、何氣なくフト後ろを眺むれば、馬の足取の悪いのも道理よ、馬上の客は逆乗りをやつて居るのぢや。これを見た馬子は大層腹を立て、馬の足取が何時にない悪いと思

へば恁麼乗り方をして居やがるのかい、コ、の狂ひ坊主めと、力任せに馬から引き摺り下した。不意に落された熊谷は例の癩癩玉が破裂して、乗り様を知らぬ狂ひ坊主奴なごゝは慮外千萬な言ひ分……と言ひも果てず、馬子の襟元ひつつかみ二三間彼方へ放り投げて、われこそは武藏國住人熊谷次郎直實、今は法然上人の弟子法力房蓮生と申す者、無禮を働かば用捨はならぬぞと破れ鐘のやうな大音聲で名乗つた、これを聞いて馬子は大に驚き、尋常一様の法師と思ふて居たにコリヤ偉い客に引つ掛つたものぢや、坂東の武士熊谷といへば泣く子さへ止むと云ふ剛の者、さて／＼今日は何と云ふ悪日やらと重々の不調法を謝り、何卒堪辨して下されませと平蜘蛛のやうになりて謝り、元のやうに馬を曳いて參つた、その時熊谷は一首の



歌を詠んだ、

浄土にも剛の者ごや沙汰すらん

西に向いて後ろみせねば

サア御一同に此ちや、念佛行者は餘行餘善に心を散らさず彌陀一佛に歸するのちやからこの熊谷式でなけねばならぬ、餘へ心を散らすのなら熊谷式ぢやない、彌陀一佛に歸して雜行雜善に心を染まさせぬが他力易行の御約束ぢや、このお約束さへ守れば今聞いて今死んでも浄土参りぢや。

さて熊谷は五十三次を越へ、月かげの草より出で、草に入るご云ふ武藏野にかゝつた、折しも先方から「下……に、下……に」の警めの聲嚴かに澤山の郎黨や家來を打ち連れて威儀堂々練つて御座

る殿様がある。

熊谷も昔にかはる麻の法衣に同じ袈裟、菅笠片手に木蔭に居たがソト馬上の殿様を見上ぐれば金欄の陣羽織赫くばかりに立派であるが、その面影が怎やら見覺へのある顔つきぢや、熊谷は誰よ彼よご心當りを思ひ浮べてみれば、見覺へのあるのも道理、この殿様こそ宇都宮三郎ご云ふ戦友であるのぢや。熊谷は思はず手の菅笠を振り捨て、

『さてく床しや宇都宮殿では御座らぬか。』

呼び止められた馬上の殿様は呼んだ出家の顔をヂロリく見下して居たが、あまり姿が變つてあるので熊谷は氣がつかぬらしい。

『宇都宮殿、斯く申すは坂東次郎ぢや。』



坂東次郎ご聞いた宇都宮三郎はそのまゝヒラリご馬を下りた、

「コレはく熊谷殿か、如何にも珍らしや、發心の趣はかねてよ  
り承りしかば、某都の大番の暇には訪づれ申さんご存せしに今  
日思ひよらざる見參にて某も満足で御座る。」

熊谷は、

「斯く大勢の郎黨にて取圍まるごも無常の殺鬼は防ぎ難し、彌陀  
の本願は念佛して信ずる者を助けまじませば、今こそは一衣一  
鉢の道心者たれ、無常の殺鬼には一騎當千の兵よりも勝れたり  
われご貴殿ごは今世後生大にかはりなり、相構へて親友の言葉  
を忘れ給はず、必ず念佛申さるべし。」

宇都宮三郎は元より愚かな武士でない、この熊谷の一言が如何にも

宇都宮の肝に銘じた、これより念佛往生のここを心にかけて居たが  
その後大番勤務の爲めに上洛して、承元二年十一月八日法然様を攝  
州勝尾寺へ訪づれ此に出家得度して實信房蓮生ご法名を賜つた。

法然様が御入滅後は善惠房に師事し、西山に草庵を結びて一向專  
念に念佛し、遂に往生の素懷を遂げられたご云ふ。

第三十二席

後白河法皇の崩御

後白河法皇は鳥羽天皇第四の皇子に渡らせらるゝが、時は建久三  
年正月五日から假りの御惱みにて臥し給ひしが玉體は日々重らせ給  
ふばかりぢや、仙洞院に於ては由々しき事ごあらん限りの手を盡さ  
せ給へごも何の甲斐も見へさせ給はぬので、この度は、行舜僧正、



法眼圓毫、法印祐賢等御祈禱申上ぐへしご、眞讀の大般若五檀の供養を修せられたれば、これにて法皇の御不豫の程も少しは減じ申すべしご近侍の方には樂み申したりしに、更に何の効驗も見へ給はず御惱は矢張重らせ給ふのみである。

近侍の方も恐懼惜く能はず、如何にせばやご一様に心を痛めぬ者はなかつたが、遂に法皇には法然上人を召すべき旨を仰せ出させられた、仙洞院からはその旨吉水の庵室へ傳へられたので、法然様は取るものも取り敢へず參内遊ばしたれば、法皇の仰せには出離の大事を如何にすべきや委しく述べよこの有難き御誼が下つた。

此に於て法然様はいご謹みて仰せられるやうには、  
『十善の御戒行を持たせ給ふ御功力は今生に極らせ給ふ、未來の

酬因はひごへに今生の持戒勤行よりあらはせ給ふなり、御榮華北闕の御たのみは今生にきはまりおはします、只往生極樂の素懷何の疑ひかあらせ給ふべき、娑婆の御たのしみは夢幻の如し極樂こそ無量無邊の法樂なり、この九重は有爲の都なるも淨土こそ無爲法性のかはりなき臺なり、念佛往生の御信心は無數の舊業を消除して一念に眞如の都へ入り給ふべき玉體ごならせ給ふなり、寶算つきさせ給へば速かに往生遂げさせ給ふべきなれごも、恩徳報謝の爲めに御念佛渡らせ給ふべし。』

ご言上せられたご  
法皇には、法然様かくはしく念佛の一行を申上げられ給ひしを深く御聽きあらせられ、やがて御座を調へさせ給ひ、兩手を胸の



あたり都合し念佛數遍して目出度往生淨土の素懷を遂げさせられた  
御崩算六十一ご聞へ申した。

御和讃の中にはこの御高德を御讚歎あらせられて、『源空勢至ご示  
現し、あるひは彌陀ご顯現す、上皇群臣尊敬し、京夷庶民欽仰す』ご  
仰せられて、何ご法然様の御高德を思ふて見れば唯感服の外はない  
只後白河法皇様ばかりが御歸依なされたばかりぢやない、三朝の天  
子が歸仰なさるご申して、高倉天皇も、後鳥羽天皇もこの後白河様  
同様に御歸依なされたのぢや、『承久の太上法皇は、本師源空を歸敬  
しき、釋門儒林みなごもに、ひごしく眞宗に悟入せり』ごも御示し  
なされたぞや、上は一天萬乘のお天子様より、堂上方では關白殿下  
を初めごして月卿雲客袖を列ねて御歸依なされ、武家にありては小

松内大臣重盛卿を初めごして、越前三位通盛卿、重衡卿、維盛卿、  
源家にありては征夷大將軍の頼朝公を初めごして賢臣名將悉く歸敬  
し、その外南都北嶺を筆頭ごして諸寺諸山の門跡大僧正、智者學匠  
みな一様に御歸依なされた、此を『源空智行の至徳には、聖道諸宗  
の師主も、みなもろごもに歸せしめて、一心金剛の戒師ごす』ご御  
讚歎なされてある。

さて建久四年、靈山平松の御房で、後白河法皇様の御一周忌の爲  
めに七日間の御別行を遊ばした、この時は結番衆二十三人居られた  
が、五日目の夜の寅の時に、法然様只御一方行道遊ばして御出にな  
つたが、その時風烈しく吹いて来て、御堂の正面の障子を吹き倒し  
その上内陣の御灯明がフツツリ消へて了ふて宛然暗夜であるが、こ



の時光明赫々照り耀きて白晝の如き有様ぢや、慈圓僧正があまりの不思議に、御堂の中を覗いて見らるゝと、結番衆の顔色は金色の光に映つてあり、法然様の御姿を拜見すれば、後ろの方に金色の圓い光明が周つてある、そして右の傍らに生身の大勢至菩薩が立ち添ふて居給ふ、法然様は行道し給ふにも少しも板の上へは足は下ろされぬ、一尺ばかり上の空中を歩かせられ、その御足の下には八葉の青蓮花を踏ませらるゝ、又御念佛を稱へらるゝその御口からは一遍く金色の光明がポツく出て耀く。

この奇瑞を慈圓僧正も月輪殿も御覽じなされて、涙に咽び五體を大地に投げて禮拜せられた。この時秋兼の三位入道觀佛は聲をあげ涙を流し、

歸命稽首大勢至菩薩、三身薩埵法然上人、生々世々值遇頂戴唱へさせられたれば、二十三人の結衆も同じやうに稱へられたと云ふことぢや。

御和讃には、『源空存在せしごきに、金色の光明はなたしむ、禪定博陸まのあたり、拜見せしめたまひけり』と仰せられて、この一事から頂いてみても並々の御方ではない、正しく浄土の勢至菩薩の御化身と云ふことは明かに知れることである。然れば弘通します御教化に間違のあらう筈はない、念佛の一行こそ末世相應の教法ぞ一代諸經のその中で撰りに撰りたる勝法なれば、權化方便に心を傾けず、飽まで彌陀の本願を信じ、凡夫直入の眞心を決得し、往生の素懷を遂げよこの御示しぢや。



第三十三席

撰擇集の御撰述

連々御取次に及ぶ法然上人の御傳記、前席に於ては後白河法皇が御臨終前に法然様を御召しあらせられ、美はしく御念佛なされて御崩御になり、又その一周忌の御法會には法然様の御頭から圓光が耀いて大勢の人々が目のあたり拜見せられたご云ふことを御取次に及んだが、いよく當席は音に名高い撰擇集御撰述を御相談に及ぶ、これぞ他力本願、浄土門第一の肝要、忠臣藏で申せば判官の由良之助に渡す九寸五分ぢや、されば先徳はこれを自宗の肝腑、往生の骨目、眞宗の簡要、念佛の奥義、希有最勝の華文、無上甚深の寶典ぢやぞよご御讚歎あらせられて、最も大切な御聖教なれば、御一同も

撰擇集  
は忠臣  
蔵の九  
寸五分  
なり

眠い目を覺して聽聞せらいでは叶はぬ。

さて或時、月輪禪定兼實公が法然様の御前へ御出あらせられて、いろく御法談にあづかられた末に、一段容を改めさせられて申上げ給ふには

「エー、御師匠様御存生の間は直々の御化導を蒙りまして、彌陀の本願、念佛の奥義も恰も明鏡に向ふが如く聽聞させて頂けますが、さりながらこの世は何時御化導下さるゝ通り老少不定殊に御師匠様も御老體にあらせらるれば何時御往生遊ばすやも計り難う御座ります、たごひ御往生遊ばさすも耳根不憶の凡夫で御座りますれば、前に聽聞申しました有難いごとも何時の間やら忘れて了ひまして覺へて居て御法喜ぶ助縁ごもなり難

法然上人御一代記説教下



う御座ります、されば頃日御教化下されたるを一通の御聖教に御製作下されまじたら、御遷化の後も、それを朝夕直々の御化導ご頂き上げ法義相續の助縁ごいたしたう存じます、この段何卒御聞き入れ下さるゝやう願ひます。』

ご御頼みなされたので、法然様も神妙の御願ひ承知仕りましたご、それから建久九年の正月一日から一室に籠らせ給ひ御撰述あらせられたのぢや。いよく出来上らせられて、清書には三百八十餘人のお弟子の中から安樂坊を召し給ひ、大切な聖教なれば他見を憚りて書けご仰せられた。

安樂坊は御師匠の御命令を蒙りて、先づ題號を頂いてみれば撰擇本願念佛集ごあるので、これぞ御師匠様が日頃教へて下さるゝ念佛

門の奥義であらうご喜び勇んでお寫し申したが、さて二行章の捨閉擲抛の所へ寫しかゝるご、さてく有難や、この一心專念彌陀名號の御文こそ御師匠様が初めて淨土門に御入りなされた時の御文ぢやそれを三百八十餘人の澤山のお弟子の中で、自分が第一番に拜見仕るごは、畢竟自分是他のお弟子方よりは手筋が良いからぢやご、安樂坊は自分の手のよいのを自慢したのぢや。

法然様はこれを御さごりなされて、末世の凡夫の往生の龜鑑にする撰擇集を聊かでも高慢するやうな者には書かすごはまかりならぬご、第四章より後は眞觀坊に御替へなされたのぢや。正信偈には邪見憍慢惡衆生、信樂受持甚以難ご仰せられて、今生後生につけ憍慢程悪いものはない、この憍慢は丁度蛇に鐵の玉を吞ましたやうな



高慢は  
蛇に鐵  
玉を  
したや  
うなも  
の

ものぢや、蛇は賢いもので鶏の卵でも呑むと高い木の上からバタリ  
り落ちる、スルこそその柏子に中の卵が割れるのぢや、けれど鐵の玉  
を呑んだら何遍木から落ちたさて割れる氣遣ひはない、そこで體が  
苦しいからしごく、しごいても仲々出ぬ故遂に蛇は死ぬるより外は  
ない、彌陀の本願は極善最上の法、お互ひの身は極惡最下ぢや、こ  
の極惡最下の機に極善最上の法を與へさせらるゝのぢやから、此方  
が邪見憍慢の高止りして居れば御慈悲の水は移つては下さらぬ、そ  
こで何時の御化導を頂いてみても、わが身は惡き徒ら者ご見局り果  
て、本願の一法に縫れご仰つしやるは此ぢや、彌陀の本願に向へば  
龍樹、天親も煩惱具足ご機の深信を起さつしやるぞや、わが身は助  
かる縁も手懸りも盡き果てた徒ら者ご見限らねば法の尊さが分らぬ

ぞや。

さていよく撰擇集は出來上らせられた、これを御傳鈔には「撰  
擇本願念佛集は禪定博陸の敎命によりて選集せしめ給ふ所なり、眞  
宗の肝要、念佛の奧義これに攝在せり、見るもの諭りやすく、まこ  
ごにこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり」と御讚嘆あらせら  
れた。

この聖典は、道綽禪師聖通淨土二門を立て、聖道をすて正に淨土  
に歸する文より、釋迦如來彌陀名號を以て懇懃に舍利弗に附屬する  
の文まですべて十六章を上下二卷に綴ち分け、法然様は自ら筆執ら  
せられ、撰擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之要念佛爲先ご書か  
せ給ふた。又月輪禪定殿下へは善惠坊を使者ごし給ひ、

法然上人御一代記説教下

撰擇集  
の大意



七四  
圖らざるに仰を蒙りて謝辭するに他なし、仍て今愍に念佛の要  
文を集め、剩へ念佛の要義を述べ、唯命旨を顧みて不敏を顧み  
ず、是則ち無慙無愧の甚しきなり、庶幾くは一たび高覽を経る  
の後壁底に埋め窓前に遺すなかれ、恐らくは破法の者をして惡  
道に墮せしめざらんが爲めなり。

ご、これを平たく頂いてみれば、この度仰せを蒙りましてお斷りを  
いたしかね、聊か念佛の要文をあつめ、彌陀の本願の勝れたごを  
述べました元より無慙無愧のしわざで御座る、すれば御覽あらせ  
られた後は壁の中へ塗り込んで了ふて下さるか、又は土の中へでも  
埋めて下され、決して他人の目にはかけぬやうにして下され、何ご  
なれば、若しやこの集を他宗の方々が見られるご彌陀の本願の勝れ

たごごや、南無阿彌陀佛の功德の廣大なごが數々列ねてあります  
で、彌陀の本願の價値の分らぬ、他力の味を知らぬ人々が見て、こ  
れはわがまゝ、勝手な言ひ分ちやご誹らるゝご、念佛誹謗の罪で阿鼻  
焦熱の苦みを受けらるゝ、それが不愍で御座りますから決して他見  
をさせては下さるなごの御注意ちや。

これを受けさせられた月輪禪定には大層なお喜び、これでこそ凡  
夫往生の鏡が出来た、これさへあらば末代の衆生も極樂參りが出来  
るぞご、歡喜の涙に咽はせられて御喜びなされたご云ふごごちや。  
さてこの撰集をわが御開山様へ御附屬なされたのはこれから丁度  
九年目に當つてあるが、その一段は次席に於てはしく御取次に及  
ぶへし。



第三十四席

親鸞聖人へ撰擇集を附屬し給ふ

上人の  
上足の  
弟子

さて今席はわが祖親鸞聖人へ撰擇集御附屬の顛末を御取次に及ぶ  
へし。前席にも御はなし申した通り、この撰擇集は禪定博陸、月輪  
殿下の御熱望にまかせて御撰述あらせられた最も大切な御聖教ぢや  
それを九年目にわが御開山へ御附屬なされた、御一同によく考へて  
みなされ、法然様の御弟子は實に三百八十餘人、その中で上足の御  
弟子云ふは安居院の聖覺法印、白川の法蓮坊信空上人、長樂寺の  
隆寛律師、鎮西の聖光坊等の御歴々が澤山に居らるゝ、わが御開山  
は末弟でホンの新米のお弟子で、この時が漸く御入室なされてから  
五年目ぢや、それに九年の間も他のお弟子へ御附屬なされなんだ大

権者さ  
権者の  
計らひ

切な御聖教を、新米の御開山へ直々に御譲りなされたのは餘程の御  
見込があつたに違ひない、それはかりぢやないこの撰擇集を御寫し  
あらせらるゝや、法然様御自ら、撰擇本願念佛集の題號ご、南無阿  
彌陀佛往生之業念佛爲本、釋綽空の二十四字を書し給ひ、その上御  
壽像を寫し奉るごを御免なされたので、御開山は早速正法坊ご云  
ふ畫工を呼んで法然様の七十の御像を寫さしめられたら、その上に  
銘まで法然様が御入れなされたごある。サアこの一事を頂いてみて  
も、浄土の樂屋で御相談なされ、念佛爲本、肉食妻帶の宗旨をお開  
き下さるに付て権者ごの芝居を仕組んで下されたのぢやご合點  
が參るであらう。

さてこの撰擇集ご申すは十六章の科段に分れてあるが、その中第

法然上人御一代記説教下



二の二行章と申すがありて、その章段には正雜二行の沙汰をなされ  
まさしく自餘の萬善萬行をば雜行と名づけ、念佛の一門をば正行と  
名づけ、その雜行を捨て、正行に本づけとある、これから諸宗の學  
者達が捨閉擲抛の四文字を咎められたのちや、その雜行は捨てよ、  
閉ちよ、擲けよ、抛てよとあるを論難せられたのちや。自餘の萬善  
萬行を雜行なご、名づけて嫌ふのは畢竟釋迦の金言に背く者にて奇  
怪千萬なりと憤られたのちや。

この時法然様の御返答に、浪路を漕ぐ舟の上には希ひ設けたる風  
なれども春の花の前にはこれを嫌ふ、六月の炎天には希ひ設けたる  
雲なれども秋の月の前にはこれを嫌ふ、三乗の法船を棹さす自力難  
行の浪路には希ひ設けたる雜行の風なれども宿善開發の花の前には

これを嫌ふ、聖道難行の炎天には希ひ設けたる雜行の雲なれども四  
十八願の月の前にはこれを嫌ふと仰せられたれば暫くは南北の碩才  
も憤りを止められたとある。これを思召せばこそ法然様もこの奥書  
に一たび高覽ありて後は窓前に残り給はず壁の中へでも埋んで下さ  
れ、破法の人をして墮獄の罪を造らしむる恐れありと書かせられた  
のちや。然るに祖師聖人は年を涉り日を涉り其教誨を蒙るの人千萬  
と雖親と云ひ疎と云ひこの見寫を獲るの徒甚以て難し、然るに既に  
製作を書寫し眞影を圖書す、これ專念正業の徳なり是決定往生の徴  
なりと喜ばせられた。

彼の漢の高祖が項羽と天下を争ふた時に高祖の忠臣張子房が圯橋  
と云ふ橋の上で流るゝ水を眺めて居らるゝと齡八十にも餘る一人の



老翁が現はれ来り、思はず自分の穿いてる履が脱げたので、老翁は張子房にその履を拾へよ命じた、常並々の者でさへ見ず知らずの他人に履物を拾へよ吩咐けたら怒るであらうに、これは又天下に名を挙げた名將ぢや、その名將に向ふて履拾へよは言語同断の不禮ぢやが、張子房は此等が武士たる者の堪忍すべき所と怒りの心を鎮めて老翁の履を拾ふて穿かせてやつた、これを見た老翁はさてく、奇特なはたらきかな、この禮には明日朝の明方に此地に來りて待ち給へ四百餘州を手の中に入る、兵法の卷物を與へんよ約束して過ぎられたとある、由つて張子房はその約束の曉に彼の圯橋の邊りに參りたれば、件の老人はその懐の中から一つの卷物を取り出して張子房に與へた、これが黄石公の三略ぢや、これを貰ふた張子房は天地に

躍りて喜ばれ、その三略の如く軍法をめぐらせられたら須臾にして勝を得、遂に漢の高祖の天下となつた、張子房は世に張良と云ふて至極兵法の達人ぢや。

今張良の貰はれたる黄石公の卷物は僅であるけれどもその中には四百餘州の天下を握らるゝ道理が籠つてあるぞや、これに准つて思ふてみられよ、恐れ乍ら法然様は黄石公と云ふ仙人の如く、わが祖師聖人は張良の働きの如く、受取られたる撰擇集は僅かなれども一切衆生の決定往生のしるしなりと喜ばせられたるは、この撰擇集こそ三經一論五祖の肝要な所、一切衆生の往生の手形、一切衆生の疑ひの敵を亡ぼす兵法の卷物ぢや故に祖師聖人がこれを頂かせられてお喜びなされたのも御道理である、この撰擇集の至極は第十八願の



三信、この三信は南無阿彌陀佛ちや、南無阿彌陀佛は吾等が往生の正體、如來正覺の果名ご心得、一念歸命の心に住してそゞろに佛恩を喜ばれたならその行者こそ即ち撰擇集を一部づゝ手の中に握られたるも同じこと。

その初めに總名代となりて祖師聖人が御受取下されたのちやで、これでこそ末代衆生の往生は間違いが御座りませぬ、凡夫往生の形を頂いたも同様で御座りますご御喜びなされたのも有理なごこと、存ぜられる。

第三十五席

興御書の由來

引續いて御取次に及ぶ法然上人御傳記、前席に於ては親鸞聖人へ

撰擇集御附屬の一段を御はなしに及んだが今席は興御書を御與へなされたる顛末を聽聞に及ぶ。

さて、法然様が月輪禪定の切ない願ひを容れさせられて撰擇集御撰述なされ、その中第二の二行章には正雜二行の沙汰をなされ、自餘の萬善萬行をば雜行ご名づけ、念佛の一門をば正行ご名づけ、その雜行を捨て、正行に本づけごあるより、諸宗の學者達が捨閉擲抛の四字を咎められ、雜行を捨てよ、閉ぢよ、擲けよ、抛てよごは如何にも釋迦の金言に違背したるわが儘勝手な言ひ分なりご憤られたるに、その時法然様は風ご雲ごの喩を以てお諭しなされたごは前々席に聽聞に及んだが、さてその後南都北嶺よりの憤りは止み難く或時月輪殿下の殿閣へ座主の人々集會せられ、捨閉擲抛に付てはな



したければ法然房か左もなくばお弟子の中の随一を遣はされよご申  
 込んだ故法然様は善信房参られよご遣はしなされた。  
 時は元久二年七月二十七日ちや、親鸞聖人は月輪殿のお邸へ参り  
 給ひたれば、座主の御房には種々法門に付て諍ひを持ちかけられた  
 善人すら尙往生す況や悪人をやご勧めらるゝご聞く、これ一向合點  
 の参らぬごこなり、又凡夫も聖者もたのむ一念に助かりて更にかは  
 りなしご教へらるゝがいよく、心得がたしなごゝいろ／＼問ひか  
 けられたるが、親鸞聖人は一言の御返答あらせられず、その中隙を  
 窺はれてスツト逃げてお歸りなされた、これを見た叡山方は嘲笑罵  
 倒し、聞くに堪へざる悪口雑言をたゝくので同じ吉水の朋輩は不甲  
 斐なき口惜しきごよご存じて居られたが、これをお聞きあらせら

れた法然様は親鸞聖人へ逃げて歸られた褒美ちやこて御書を下され  
 た、これが世間に名高い興りの御書、或は印可の御書ごも申すのち  
 や。  
 昨日殿にて座主の御坊へ参會、法門仰せかけて誹謗し給ふ由承  
 候、不苦候、餓鬼は水を火ご見候、自力根性の他力を知せ給は  
 めが哀に候、只源空が痛む所は門徒ご稱する人々の中に不思議  
 を源空がをしへ候ご云へるが淺間敷候、常に申様に浄土宗の意  
 は機は十方衆生心は助け給へご思計、行は一念も十念も決定往  
 生なり、佛願に順ずるが故にご、相承する外に全く別の法行も  
 示もなし、されば父母も愛執の中より生れたる、生れ付きの三  
 毒五欲の機乃至臨終に火車の現ずる時、始て一念稱へて無量劫



八六  
の間の重罪をも今生の十悪をも五逆をも一念の間に能滅し、火  
車の轆をかへし、華臺の來迎あり、機は三寶滅盡の時の族まで  
も只一念南無阿彌陀佛と申せば、極樂世界の七寶の臺に生れて  
正定聚不退の位になりて二度輪廻の郷にかへらず、剩へ生々世  
々の六親等の惡道に墮して苦ふかきを濟度するにて候、これは  
何故ぞと申せば、他力の故にて候也、忝くも書に付ても筆の立  
所もしらざる程涙にむせび候、予が門人にも聖光房、勢觀房、  
禪勝房、善心房、いつもあやまりせぬ人々にて候、向後も座主  
なごのいらせ給ふ處にけてかへらせ給そろへ候、穴賢。

善心房

源空御判

八七  
今、源空が申法門は、佛の説給ふ經の文に、設我得佛十方衆生  
等と云ほごけの願、善導和尚の若我成佛乃至彼佛今現等の釋義  
の意なれば、よも誰人成共誹謗はし給はば、此義さなしといは  
んや、外道天魔の類なるべし、更に所難の趣ごりあぐべから  
ず、又一念業成之事、平生臨終三寶滅盡之時の機にありと、決  
定せらるべく候、法華堂の座主の智行そろはせ給ふさへ、終に  
情を折專修に成給ふに、今の座主の御坊の給ふは雀の轉るに  
異なるべからず、予は一切經を二十六箇年をへて、五返迄見盡  
して六宗の達者にあひて申極め、今淨土宗を建立し候、更に私  
にはじめて申立にあらず、異人にはごをさかるべくにて候、貴  
坊形見ご候間爲念佛證據予が影進之候

法然上人御一代記説教下



八八  
ご、なされて遣はさせられたは親鸞聖人が逃げて歸らせられた御褒  
美ぢや。

斯く頂いてみればお互ひに不審が起る、座主と會合なされて法門  
に御勝ちなされてこそ御褒美と云ふこともあるに、逃げてお歸りな  
されたのにこのやうに御褒めなされたのは何の爲めぢやと云ふに、  
これは世間にもよく云ふ通り同じ勇者と申しても仁義の勇者と血氣  
の勇者とある、仁義の勇者と云ふは進むべき時には進み、退くべき  
時には退く、一進一退その機に應ずること云ふが仁義の勇者ぢや、血  
氣の勇は只前後の辨へも考へもなく、一時の逸る血氣にまかせて進  
むのぢや故に決してその當を得て居らぬ、わが日本は昔から武を尙  
ぶお國柄ぢやが、その日本魂と云ふは決して血氣の勇に逸るのでは

ない、云はゞ仁義の勇ぢや、一宗開闢の祖師ぢやもの、只一時の血  
氣の勇に逸りて輕擧の振舞に出で、何の結構な御法義に傷がつくや  
うなことをなされよう、水を見て火と見るやうな人々に論争したと  
て何の利益があらうとこそそのまゝ隙を見てその場をお外しなされたの  
ぢや、誠にその當を得たる振舞、別して佛法の方から云へば微塵も  
我執我慢のまゝなさぬことなれば、我等如きわが心得貌して、たま  
く同行會合の折にでも是非を争ひ、宿善の有無を辨へぬ者の爲め  
になされてみせさせ給ふたこと、思へば、これを聽聞させて頂くに  
つけても、何から何までの御骨折りご御慈悲の程を仰がねばならぬ  
蓮如様は人にまけて信を取るべしと仰しやつてある、我慢憍慢の  
心があつては佛法は頂けぬ、この心があつたばかりに無始以來迷ふ



て來たのちやで、今云ふ今は人にまけて信を取るべし、七百年昔の御開山の御なしわざに見做ふて、偏執我慢の心をサラリと捨て、わが身は悪き徒ら者、墮ちるより外に手段のない奴を、何云ふ御慈悲やられたのむばかりでこの儘お引受け下さるは三世に一體、恒沙一佛の如來様ばかりぞこムズこ絶り参らすより外はない。

第三十六席

七個條の起請文

法然上人が御年四十三歳にして浄土の門戸をお開きなさるゝや、時機相應の要法、萬機普益の御本願なれば、世普くこれにこそり人悉くこれに歸し、紫禁青宮の政を重する砌にもまづ黄金樹林の蔓に心をかけ、三槐九棘の道を正くする家にも直ちに四十八願の月をも

貴賤轅  
を回ら  
し門前  
市をな  
す

てあそぶ、しかのみならず戎狄の輩、黎民のたぐひこれを仰ぎ、これを貴びず云ふことなし、貴賤轅をめぐらし、門前市をなしたごある。

別して、後白河法皇、高倉院、後鳥羽院の三朝は深く御歸依あらせられ、中にも後白河法皇には御臨終近くに法然様を御召しあらせられ、念佛ごもく御崩御あらせられたごは先日聽聞の如くちや又高倉院様には承安五年の春敕召ありて一乘戒を受けさせられ、又後白河法皇の十三回忌御法要には法然様は蓮華王院にましくて淨土の三部經を書寫し給ふなご、又上西門院、修明門院なごの方々も同じく御歸依あらせられ、又九條關白殿下を初めこして月卿雲客より武家衆に至るまで先を争ふて御入室なされた。

法然上人御一代記説教下



上を見做ふ下々は猶更甚しく、農夫は鋤鉞片手に念佛申し、織女は梭と共に唱名稱へ、木の下には念佛と共に蹄を取り、舩を叩く海上には六字を稱へて魚を釣る、雪月花を觀る人は西樓の月に目をかけ、琴詩酒に耽る輩は西の枝の果をよづ、彌陀を崇めざるを瑕瑾とし、念佛を稱へざるを恥辱とす、華族英才たりとも念佛唱へさればをこしめ、乞丐非人なれども念佛するを以て褒む、されば八功德水の上には念佛往生の蓮池に満ち、三尊來迎の營みには紫金蓮臺をさしをくにひまなし、かゝる有様なれば聖道難行の門自ら塞がり、自力修學の窓遂に閉ちて四ケの大寺を始めとして千萬の小院に至るまで庭上に草しげり、徒らに狐狸の栖家と荒れ、四面の垣傾きて僧侶の跡絶へ、扉は風に倒れて落葉の下に朽ち、瓦は雨に犯されて佛壇

更にあらはなり、曉の月は軒より洩れて自ら眉間の光かこ誤られ、夜の嵐は板間に徹して烏瑟の髪を梳づるを覺ゆ。  
されば諸寺の釋門嫉み妬み、忌み憎んで、如何にしても淨土宗を停止せんご度々難題を申かけるもその度毎に九條關白が押し鎮めて居られたが、猛り狂ふ法師ばらは遂に元久元年の冬、叡山大講堂の鐘を朝からゴーン／＼と撞き鳴して三千の大衆を大講堂の前へ集めあらうごこか虎狼にひごしい山法師は法然様が念佛興行あらせられたに由りて全く聖道門廢退せり、これ法然様の罪咎ちやご心得て朝廷へ淨土宗停止を御願ひ申したのちや、雙六の賽と鴨川の水と山法師ごはまゝにならぬご仰せらるゝ位な無法者で止むなく念佛は停止ご仰せ付けられた。



此に於て法然様も詮方なく、山法師の鬱憤を晴す爲め、且つはお弟子方の僻見を誡めんが爲めに御門弟の方々を集めさせられ七箇條の起請文をなし、宿老の方々の御名前八十餘人を列ねさせられて座主僧正へ進ぜさせられた、この時の執筆は法蓮坊信空上人で、わが御開山のお名前も七十九番目に緯空として擧げられてある、この起請文は只今嵯峨の二尊院の寶物となつてあるぞや。

釋迦如來は大集月藏經の中に、末法は白法隱滯鬪諍堅固の世の中とお説きなされてあるが、まことに違ひない世の中となつて來たのぢや。又善導大師は五獨惡時多疑謗、道俗相嫌不用聞と仰せられて末代になれば互ひに疑謗して有難い御法を聽聞する者は少いがあるかゝる多疑謗の世の中にありながら眞實御法を聽聞し、後生の大事

に夜の明けた人なればそれこそ希有人ぢや、最勝人ぢやと御褒めあらせらるゝのぢや。

さて、法然様が七箇條の起請文を座主の手元へ差し出しなされたので、山法師の憤りは一時止んだけれど、御一同にこの時の法然様のお胸の中を推し量つてみられよ、我慢偏執の叡山僧へ、悪うもない彼尊が七重の膝を八重に折り、萬望堪忍して下され、念佛弘めましても必ずこれはしませぬぞ、叡山方の云ふ通り御無理御最もで、胸撫で下ろし、堪忍袋の緒をしめて御差出下されたのは外ではない何卒念佛の一行を末の世のわれ〜に残し同じ一味の花の證りを開かせたいの御思召より外は御座りませぬわい。勿體なくも大勢至菩薩の御化身が、虎狼にひこしい山法師へ、この通り源空は頭を大地



に摺りつけて誤りますと恥も外聞も厭はせられず涙と共に御辭儀なされたのは只々末代のお互ひが可愛ばかりぢや。

七箇條の起請文の外に、法然様が御一人で、彌陀の本願にも唯除五逆誹謗正法ごあるから、念佛をすゝむるわれ何ぞ正法をそしらんや、もし虚言を申さば毎日七萬遍の念佛空しくその利を失はむと仰せられて座主まで御出しなされた。智慧第一の法然房、權化再誕の彼尊にこのやうなムゴタラシイことを言はせ申し、謝らせましたは他人ぢや御座らぬ、皆んな在座のわれくぢや。

その時お弟子の一人が申上げらるゝやうには、この頃念佛も停止せよと云ふ位の喧しい時節、やゝもすれば御師匠様を死罪にも行はれようかと云ふ物騒ふ折柄なれば、少し御念佛を御つゝしみなされ

ては如何で御座りましよう、御師匠様が御出にならねば私共は舟の舵を除られたやうなもので御座りますと申上らるゝご、何時になく法然様の御機嫌が悪い、彌陀の本願は釋迦出世の本懐、十方の諸佛も口を揃へて證據護念あらせらるゝに、唱ふる念佛が咎なるなら源空の口は八つ裂きにせらるゝごもこの念佛は一日も止めるごはならぬご少しも御遠慮はなかつたごある。

怎ぢや御一同に念佛停止の時節でさへも少しも御遠慮なく唱へさせられたごあるに、今や大正の時代に誰に遠慮や氣兼ね入らう、稱へて參る淨土ぢやなけねご、御恩の程が知られて見れば唱へなご止められても唱へずには居られぬお念佛、殊に法然様御一代の御苦勞を偲んでみれば、海ごも山ごも喩へようのない御恩徳、せめては口



九八  
に浮む念佛なりとも唱へて御恩の程を偲びましやうの思ひから、只何の中からも稱名相續せらるゝが肝要。

第三十七席

松虫鈴虫と出家功德經

相續いて御相談に及ぶ法然上人御傳記、當席は念佛停止、法然様御流罪の原因たる松虫鈴虫出家のいはれを御取次に及ぶ、さて法然様のお弟子に住蓮房、安樂房と申す二人があつた、この兩人の素姓を尋ぬるに元は歴々の武士で、住蓮坊は北面の武士清原次郎左衛門信國と云ふて伊勢の人ぢや、又、安樂坊は俗名を阿部判官盛久と申して五百石取の武士、かねてこの兩人は無二の親友であつたが、一日兩人打ち連れ立ちて吉水の御庵室へ參詣したのが佛縁となりて、

住蓮安樂の素姓

遂に出家してお弟子となり、その頃俊寛僧都の捕はれて鬼界ヶ島へ流されてから空しく荒れて狐狸の栖家となつてあつた鹿ヶ谷の法性寺を繕ふて住むやうになつた。

然るに建永元年七月十五日の盂蘭盆會にこの兩人は鹿ヶ谷へ法然様を御請待申し、別時念佛を勤められた、この評判が京洛中に傳はるや老若男女われ先にご參詣申し東山は時ならぬ大賑ひ、道往き交ふ人々は皆手に珠數を持ち口に念佛を湛へぬ者はない。然るに此に後鳥羽院様が日頃から御寵愛淺からぬ松虫、鈴虫と云ふ二人の局がある、松虫は十九歳、鈴虫は十七歳何れも絶世の美人であるが、兩局は打ち連れ立ちて清水寺へ參詣せられたが、東山は殊の外賑ひ往く人も南無阿彌陀佛、還る人も南無阿彌陀佛、男も女も若きも老

鹿ヶ谷の別時念佛

法然上人御一代記説教下



ひたるも、皆一樣に有難さうに珠數爪繰りて念佛して居るので、兩局は不審に思ひ、お供の舍人に尋ねさするご、只今鹿ヶ谷に於て法然様の別時念佛が勤まり、別して今日は女人の爲めに御化導なさるので御座るこのご、聞いて兩人は互に顔見合せて、参りましようか、参りましようご、此に宿善到來し、それから仙洞御所へ歸らるゝ足を枉げて住蓮山安樂寺へ御出になつたのぢや。折しも往蓮安樂は六時禮讚をつこめて居らるゝ、

南無至心歸命頂禮阿彌陀佛

安樂國清淨、常轉無垢輪、一念及一時、利益諸群生、願共

南無至心歸命頂禮阿彌陀佛

讚諸佛功德、無有分別心、能今速滿足、功德大寶海、願共

南無至心歸命頂禮阿彌陀佛  
あはれに殊勝な禮讚の節は打ち鳴す鉦鼓に和して腸を抉らるゝやうに響く、參詣の人は庵室に満ち充ちて、唱名の聲は堂外に溢れてある。

やがてこの六時禮讚が了るご御師匠法然様は慈悲忍辱の御顔に稱名を唱へさせられてしづくご高座の上に登らせられ、念珠爪繰りながら御法語を遊ばす。その御説きなさるゝ事柄は出家功德經の由来である。

佛在世の時に天竺に吼蘭女ご申す女があつた、一日迦留陀夷尊者の説法を聽聞して、あまりの有難さに自分の亭主の不在中にも拘はらず頭の飾りを落して尼ごなつて了ふた、然るにこの亭主が歸つて



一〇二  
來て、吼蘭女の尼となつて居る姿を見て大に怒り、亭生の不在中に  
尼となつたのは定めし不義徒らをしたが爲めであらう、横着千萬な  
尼奴、逆も尋常で置かれる奴ぢやないご散々に打擲し、そのまゝ牢  
屋へ押し込んで了ふた、可愛想なのは吼蘭女で、尼になつたばかり  
にあらぬ疑惑をかけられて罪も無いのに暗い牢屋の中の住居ひ、而  
しこれも前生からの約束ごと、諦めて暮す中、一旦剃り落した頭の  
髪は次第／＼に伸びて一年程経た後には元のやうな姿になつた、こ  
れを見た良人は大に喜んで、無理無體に還俗さして了ふた。  
然るにこの吼蘭女が命果て、後焦熱地獄へ墮在したるに一人の獄  
卒來りて、この女は娑婆にある時一度出家したることあり、その功  
徳にて地獄へは墮されまいご云ふご、この時六道能化の地藏菩薩が

現はれ給ひ、その元は一度出家したることあらねども又還俗したる  
罪あれば地獄へ墮せご仰しやるので、あはれ吼蘭女は良人に強いら  
れて還俗したる罪で地獄へ遣られて責苦を受けたが、やがてその罪  
も消へたので、一度出家したる功德があらはれ來て、吼蘭女は申す  
に及ばず、同じ地獄に苦んで居た罪人までが天上界へ生れたごある  
因縁をくはしく御説きなさるゝご共にたごひ今生は富貴の家生まれ  
衣服は香を薫じ、食は百味を具へ、身は松竹によそをへ、命は鶴龜  
ご祝ひ諸人萬人に敬はるゝ身なりごも一つの息永く絶へ、二の眼の  
忽ちに閉ぢぬれば、天にありては飛翼の鳥、地にありては連理の枝  
ご思ひし人も久しく止まるごごならねば、やがては野外に送りて夜  
半の煙ごなしてめれば残るは只白骨のみにて、魂はひごり冥土に



赴けば、藏に充ちた財寶も函に入れた珠玉も身に添ふものは一物もなく、かねて頼み置きつる妻子眷屬も一人ごして連れ、伴ふこと叶はず只獨り出蒐け、目に見ゆるは牛頭馬頭の姿、耳に聞ゆるは阿房羅刹の呵嘖の聲、この時になつてから、さてく、娑婆にありし時信ぜよ行ぜよの御教化のありつるものを信じもせず行じもせずして今この苦を受くることこの残念さよと黄なる涙を流し血の汗を垂らして天に叫び地に呼はりて千萬後悔するごも一度仕損じたら二度ご取り返しはならぬが後生の大事であるぞ、後生こそ一大事ぞご思はれたなら唯彌陀を頼め、頼めば助け給ふごことは宛然山に向ふて叫べは直ぐに山彦の呼び返す如く一念歸命の立所に待てしはしのない攝取心光の御助けぞご御説きなされた、これを聞かれた松虫鈴虫の兩人は

さてく、今生のことは善いご云ふも悪いご云ふも夢の世の中、王宮にあつて錦を身に纏ふも夢幻のうちのこごなれば久しく保つべきにあらずご、互ひに涙を流して感じ合はれた。

さてこれよりいよく、兩人は仙洞御所を忍び出で、法性寺へ來り出家得度せらるゝこごちやが長席の恐れあれば次席に於てくはしく御取次に及ぶべし。

第三十八席

松虫鈴虫御所を忍び出づ

さて席を重ねて御相談に及ぶ法然上人の御傳記、後鳥羽院様の御寵愛淺からぬ松虫鈴虫の兩局が東山鹿ヶ谷に於て法然上人の御化導を聽聞せられてから歡喜の涙に咽び、御慈悲の程が身に滲みて、よ



くく思ふてみれば淺間布や、たごひこの世は身に錦を飾るごも後生の糧がなかつたなら未來は永々劫無間の釜焦り、今お互ひに御法義に入らずばタツタ今三塗に迷ふて浮ぶ瀬はなし、呼この世は僅かの夢で御座る幻で御座る、捨て、置けぬが後生の大事、法然様の御化導を頂いてみれば出家になるのは功德廣大なりご、殊に第三十五の願は吾等女人の爲めに重ねてお誓ひなされたごなれば今のうちに出家して佛道に心がけ彌陀の御慈悲を喜ばずば無量永劫浮ぶ時節は御座りませぬご互ひに相談して、いよく住蓮安樂をたづねて剃髪するごご、決められたが、元より御寵愛淺からぬ身の上ちやで、假りにも忍びて出ることにはならず、八重九重の禁裏の奥なれば如何はせんご打ち案じて居られたが、時は建永元年十二月十九日、後鳥羽

院様には紀州熊野へ御參籠あらせられ、院に仕ふる百官百僚は悉くお供した。

時こそよけれ、日頃から思ひ立つ出家の願ひはこの時に達すべしご、年も暮れんとする師走の二十六日、太上天皇御不在にて只さへ静かな都の夜は消へ行くばかり、これ屈竟にこそご兩局は暗に乗じて仙洞御所を遁れ出て東山法性寺へ志した。元より忍びの身なれば道を照す火光のあるべき筈なく、トボくご東山の山阪を夜半の嵐に吹き曝されつ、漸く法性寺に着いた。

住蓮、安樂の兩人は、昏時の勤行をすませつ、佛前の御灯火を消して臥床に入ると誰ごも知らず外から呼ぶ聲がする、時は年の暮れの眞夜中に訪づる者は恐らくあらじ、狐狸の類ひか左もなくば耳の



故に尙も目睡まんごすれば、又も幽かに呼ぶ聲がする、住蓮坊は思はず起き上りて、

「何人なるぞこの夜中に。」

ご聲かくれば、外からは女姓の聲ご覺しく左も忍びたる容子に、

「頼みの條あれば此明け給はれ。」

怎やら狐狸の仕業でもなささうなので、

兩廡法  
性寺に  
つく

「この庵室はかゝる眞夜中には開け難し、要事があれば明朝參られよ。」

「明朝參りてよき程の要向ならば強いて今宵來はせじ、枉げて開けられよ、委細は御目もじの上にてお話し仕るべし。」

住蓮坊は安樂坊を起した、起された安樂坊は衾を離れて外の容子

を窺ふて、

「ヨモ狐狸にもあるまじ、さりごと三衣一鉢の沙門の家へ物取り

の者ごも覺へず、開けて入れ申しては如何で御座る。」

この聲に勵まされて住蓮坊は庵の戸を開けば、こはそも如何に、蘭麝の香芬々として、衣摺れの音奥床しく、見目よき上臈がゾロ／＼

ご二人まで入り込んで来た。

やがて兩局は驚く住蓮安樂の前に兩手をつき、

「妾共は仙洞御所に仕へまつる松虫鈴虫ご申す者で御座りますが

過し七月十五日御當庵に於て法然上人の御化導を承り、そゞろ

世の無常が知られ、何卒一時も早く世を遁れて佛道に入りたき

ものご思ひしも、何を申しても身のまゝにならぬ宮仕への窮屈



にて、心ならずも今宵まで延しつるが、こたび上には熊野へ御  
參籠あそばし、百官の方々には供奉申されて院には人なきを幸  
ひこして忍びて参り申したり、何卒兩人の切なる願ひを叶はせ  
給ひ今宵飾りを落して出家たるやう、御許し下されたう存じま  
す。』

この意外の人が意外の願ひに先づ住蓮安樂は度膽を抜かれた、や  
がて我に返つた安樂坊は、

「それは近頃珍らしき殊勝なお心がけ、さり乍らお見受け申せばま  
だ年若き上臈達、來世の苦患を遁れて淨土に生れんとするには  
強ち出家するにも及ぶまじ、彌陀の本願は出家ご在家ごの撰び  
なく只一心に歸命して專念に念佛せば往生に間違はなし、先づ

出家の儀は思ひ止まられよ。』

これを聞いた兩局は膝押し進め、

「左様に仰しやるは御有理なれご一度思ひ込んだこそなれば枉げ  
て許させ給はれ。』

「今を盛りの花の身、ムザく飾りを落さるのは父母に對しても  
孝ならず、まづく思ひ止まれよ。』

「イヤ、御出家様、何ごしてゞも妾等の願ひ叶ひさせ給へ。』  
最前から灯火を持ちつゝチツト聞いて居つた住蓮坊は口を開き、

「左承れば御有理のやうなれごも、今は吉水の御師匠様が念佛弘  
めさせ給ふので山門の衆徒は嫉みの眼を見張り何か事あれかし  
ご待ち構ゆる時節なれば、若しこの庵にて若き上臈達を出家せ



しめたご聞へては如何なる難題を申しかくるごも限り難し、且つは御身達は院の御寵愛淺からぬご承れば、逆鱗の程も恐れあり、何れにしても今宵は思ひ止り、院の御ゆるしを受けてから吉水へ御師匠様を訪ね申され、その上にて發心せらるべし。』

スルご兩局は安樂住蓮の法衣の袖に縫りつき、  
「妾等こそ今宵は宿衛の目を忍びて出でし者なればヨシこのまゝ院に歸るごも重き罪は免れまじ、若し御聞き入れ下さずば元より一命は覺悟の兩人で御座ります。』

「松虫の内侍、かねて覺悟の通り。』

「オ、鈴虫ごの、斯かる上は詮方なし。』

兩局は今にも自害しようとする容子である、懷中から抜き放ちた

る閃々たる戒刀を住蓮安樂は手早く取り奪ひ、

「コレく短慮をし給ふな。』

「そんなら妾等の願ひを許させ給ふか。』

「ぢやご申してこの夜中急に……。』

「然らばその品返し給へ。』

花も色を奪はるゝやうな二人の宮嬪は互ひに相擁き合ふてヨ、こばかりに泣き伏した。

住蓮坊も安樂坊も泣き伏した、

「吁、沙門の身ごして現在目の前でムザく自害させて殺生戒を破るごはならじ、さりごて願ひを叶はせば上に對して恐れあり……。』



宜し、たごひ身を八つ裂きにせらるごもその御望み聞き届け申さん。』

進退谷まつた兩人は此に出家させんご決心し、松虫鈴虫はその夜縁の黒髪を落して比丘尼の姿となつた。

斯かる切ない思ひをして出家を願はれたのは明日をも知れぬ無常の身ちや故である、然るにお互ひにギヤツご生れてから浄土眞宗の家で育ち千座萬座の聽聞重ねてもまだ後生の大事に安心がならぬのは何故ちや云へば今年や來年はまだく死なぬ積り、他は死んでも吾身ばかりは何時くまでも生き延びんずるやうに未來の大事に長綱を張つて居るからちや。今松虫鈴虫の一命かけての切ない願ひを聞かるゝにつけても、ホンに淺間布は私で御座るご氣がついた

兩嶺の  
出家を  
諾す

なら、雜行すて、彌陀を頼め、彌陀を頼んだ衆生ならお洩しのない御慈悲ぞこの御化導故に、いよく彌陀の大願業力に縋られた上には報謝の稱名懈怠なく相續せられよ。

### 第三十九席

#### 松虫鈴虫の出家

連々御取次に及ぶ法然上人御一代記御傳、さて前席では松虫鈴虫が宿善到來し、時は建永元年十二月二十六日の眞夜中に、東山法性寺へ住蓮坊、安樂坊をたづねて參られ、強いて出家したいご望まれたので、住蓮安樂も遂に否みかねてその望みを容れられたご云ふことを御取次に及んだ。

この時松虫鈴虫の喜びは一方ならず、歡喜の涙に咽ばれたごある

法然上人御一代記説教下



望みの  
程嬉し  
いこと  
はない

一六六  
何が嬉しいご申しても自分の望みの達せられた時程嬉しいことは御座らぬ、望みご申しても人々各々で人毎に由りて望みが違ひ、高い望みもあれば卑い望みもあり、大きい望みもあれば小さい望みもあるけれど、その大小高卑に由らず達せられた時は嬉しいものであるけれどその中でも高尚な望み程嬉しみが何時までもつゞき、野卑に流れたる望みは、たごひ一時は嬉しうあつても少時するご厭氣がするものぢや。

私は永年聖徳太子の御廟へ参詣したいと望んで居りました、けれども世の中は仲々思ふやうには参らぬもので、道程で申せば三十里餘りの所、汽車で行けば暫時の間ぢやがそれがイザなるご色々妨げが出来て参り遂に今年まで参れなんだのぢや。御承知の通り、聖徳

三骨一  
廟三尊  
位

太子の御廟は河内國磯長にありて、太子四十二歳の御時自ら廟窟を築かせられ、われ入滅の後にはわが骨は申すに及ばず、わが母もわが姫も三骨皆此に埋むべしと御遺言あそばし三骨一廟三尊位と云ふ碑銘まで認めてをかせられた靈廟で、既に弘法大師も御籠りになり、近くはわが御開山様が十九の御時に七日の間御籠りなされ、

我三尊は塵沙界を化す

日域は大乗相應の地なり

諦かに聽け諦かに聽けわが教を

汝が命根は應さに十餘歳なるべし

善信よ、善信は眞の菩薩なり

ご云ふ靈告を蒙らせられたごは御一同に毎々聽聞せらるゝ通りぢ



や。

拙僧は河南鐵道の喜志驛で下車し、それから通法寺村に申す源氏の廟のある村に知己があるので其地で一休いたし、それから正しく磯長の御廟へ参詣したのちや、三骨一廟の在ますのは叡福寺に云ふお寺の本堂の裏で、何とも申しやうのない有難味が湧いて参る、丁度拙僧の参詣した時には、皇太子様が御出遊はす前で澤山の石工が来て騒いで居つた時でありましたけれど、拙僧は遙か下座して小經一卷拜讀申して参りました。

御廟から七八間離れた所に見眞堂に云ふ新しい御堂が建つてあるこれはその昔御開山がお籠りなされた紀念として、その土地の奉讚會から建てられたものちやに云ふことちや、何れを拜してみても實

磯長の  
見眞堂

勝軍寺  
の古跡

に凄いやうな有難味が湧くばかりで、甚麽悪人でもお敬ひの心の起らぬ者はあるまいと思はる、拙僧は幾度もく拜し、更に八尾在の松原村にある勝軍寺へ参詣しました、磯長の御廟を上の子に申し勝軍寺の方を下の子に申し居らるゝ、この勝軍寺は聖徳太子が守屋の逆臣を御亡ぼしなされた所で、太子様を馬共に御庇ひ申したご云ふ椋の樹を初めとして馬の蹄の痕、守屋の首洗池、守屋の墓、その他お寺には澤山な寶物がある。此寺へ参詣すれば太子様が佛法興隆して下さるのにはこれだけの御苦勞をして下されたかご云ふことが分かる。御一同にも縁があれば是非一度は参詣せられんことを望む、拙僧も前申す通り永らく参詣申したいと思ひ乍ら、ごうぐ本年まで参ることが叶はなんだが、怎やら斯やら本年はその宿望を

法然上人御一代記説教下